

エゲリア巡礼記

太 田 強 正

はしがき

「エゲリア巡礼記」と呼ばれる聖地巡礼記は諸説はあるが、紀元400年頃、当時ローマの属州でヒスパニアと呼ばれていたスペインの北西部ガリシア地方のエゲリア、あるいはアエテリアと呼ばれる修道女によって書かれたと言われている。この修道女がどんな女性だったのかは分かっていない。ただこの巡礼記の内容からすると好奇心の強い(16章)、あまり年をとっていない、体の丈夫な人であったようである。というのはアフリカ北部、シナイ半島、パレスチナを歩き、コンスタチノーブルに渡っているからである。当時このような旅行は死を覚悟の上のことであった。彼女自身、仲間の修道女たちに「私の光である婦人たちよ、あなた方だけは私が生きていようと、すでに死んでいようと、私のことを憶えていてほしいと思います」(23章)と書いている。ちなみに英語のtravelは「tripaliumという拷問の道具で苦しめる」という意味の平俗ラテン語(後述)の動詞tripaliareから出ている。私たちが知っているフランス語トラバール(travail「仕事」)も同語源である。

彼女の出身地ガリシア地方は現在はポルトガルと境を接し、乾燥した気候のスペインの他の大部分の地方とは異なり、雨の多い、低い山々の連なる湿潤な地方で、大西洋に面した非常に風光明媚な所である。日本でも知られているリアス式海岸はこの地方の入り組んだ海岸線に流れこむ多くの河川の河口部分である「汐入り川」を意味するスペイン語ríaから来ている。

ヒスパニアからは五人のローマ皇帝が出ているが、その中の一人テオドシウスがこのガリシアの出身であった。彼はキリスト教をローマの国教とし、帝国を東西に分割した皇帝として知られているが、エゲリアはどうもこのテオドシウスの縁続き、あるいは知己であったようである。巡礼の道程のある部分、彼女にローマ兵の護衛が付いている。

この「エゲリア巡礼記」は当時のラテン語で書かれており、歴史言語学上、記念碑的作品であり、非常に貴重な資料となっている。というのは、この時代のラテン語は、古典からは大きく変化しており、ロマンス語誕生前夜の様相を呈しているからである。

ロマンス語とはラテン語から出た諸言語の総称で、大きく分けてイタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語等、10の言語から成っている。ロマンスという語はラテン語の *romanice*（ローマ風に）という副詞から出ていて、*romanice loqui*（ローマ風に話す）のように使われていた。「ローマ風に」とは「口語体のラテン語で」という意味である。当時書かれたものはすべて文語体ラテン語で、それを理解できるのは一部の教養階級だけであった。ところが時代が下ってくると、次第に民衆のために口語体、つまり話し言葉で物語などが書かれるようになる。それと共にこの *romanice* という副詞も、「口語体ラテン語」それ自体を指す名詞となり、またそれでつづられた物語などをも意味するようになっていった。この *romanice* で書かれたものが、大衆向けの恋愛譚であったり、冒険譚であったために、ロマンチックという形容詞が後世になって生まれた。

さてこの「エゲリア巡礼記」は口語体で書かれているわけではないが、当時の口語体の反映と思われる語句に満ちている。現代ロマンス諸語は文語体ラテン語からではなく、正にこの口語体ラテン語から生まれた。口語体ラテン語は平俗ラテン語とも呼ばれている。ここにこの巡礼記のもつ重要性がある。

ほんの一例であるが、ラテン語の名詞には主格（～は）、属格（～の）、与格（～に）、対格（～を）、奪格（～によって）、呼格（～よ）の六つの格があるが、平俗ラテン語では格が次第に消滅していき、現代語のように「前置詞＋名詞」の形でそれを補う方向に変わっていく。例えば, episcopus sedens de manibus suis summitates de ligno sancto premet, (司教は座ったまま、手で聖なる木片の端を持ち) においては、de ligno sancto (聖なる木片の) は属格ではなく、「前置詞 de ＋名詞 (の奪格)」で表されている。なお、premet も古典では premit である。

反対に古典のつづり通り正確に書こうという意識が過剰に働いて、すでに発音されなくなっていた h を本来ないところにまで書き加えてしまった hiuit (彼は行った) という形も見られる。これは正しくは iuit で、一般に過剰訂正と言われる現象である。

宗教的にも興味ある語の用法が見られる。カトリックの礼拝式をミサと呼ぶが、この語はラテン語で「解放」、「解散」を意味する missa である。ではなぜこれが礼拝式を指すのか。それは司祭が式の終わりに、必ず信者たち向かって、ラテン語で *Ite, missa est.* (汝等行け、解散である) と告げていたからである (*missa est.* の部分の解釈には異説がある)。つまり式の終わりを告げる語が、式そのものを意味するようになったわけである。この巡礼記では、missa は本来の「解散」と「ミサ聖祭」の両方の意で用いられている。ただしこの時代はまだ「解散」という意味が普通であつたらしく、「ミサ聖祭」のときは、わざわざ別の言葉で言い直している箇所(27章)もある。

この巡礼記は主に聖書ゆかりの地を訪ねる旅を綴ったもので、旅先で聞いた聖書の正典には出ていない話も語られており(19章)興味を引くが、かなりの欠損部分があり、テキストの始まる1章の前には、テーベ等エジプトの聖地への巡礼の様子が記されていたと思われる。テキストの1章か

ら23章までは、シナイ山をはじめ現在のパレスチナ及びその周辺の多くの聖地への訪問の様子が書かれており、24章以降は当時のエルサレムで行われていた典礼のことが事細かに述べられている。この巡礼記が書かれた紀元400年頃はギリシャ・ラテン語世界の人々にキリスト教の聖地訪問熱が高まった時代であった。そのような背景の中でこの巡礼記は生まれた。ここに書かれている当時のエルサレムの典礼は、その分野の研究者にとって非常に貴重な資料となっているが、なんと言ってもこの作品に記念碑的意義を与えているのは、上述のようにその歴史言語学上の価値である。

本文の24章以降に頻繁に見られる「復活教会」、「殉教者記念堂」、「十字架像」などはキリストが処刑されたゴルゴタの丘と考えられている場所に建てられた「聖墳墓教会」と現在呼ばれている一画にある建造物である。

本書はラテン語・フランス語対訳本 (Journal de Voyage, Les Édition du Cerf) からの翻訳である。英訳 (Diary of a Pilgrimage, Newman Press) も参照した。翻訳に際しては、文意を伝えるには不必要と思われる、頻出する小辞はできるだけ省いた。それでも同じような文や表現の繰り返しは訳さざるをえなかった。

本文中の固有名詞は新共同訳聖書に記載のあるものはそれに従い、他は慣用に依った。なお「」は原文にはないが、引用文であると翻訳者が判断した個所につけた。() も訳文を補うため翻訳者の判断で入れたものである。

エゲリア巡礼記

(多くが欠けている)

1

聖書に従って示されました。道を進めていくと、私たちは、今まで通ってきた山々が開けて、限りなく広がる巨大で平坦な、非常に美しい谷になっているところに出ました。すると谷の向こうに神の聖なる山シナイ山が現われました。山が開けたこの場所は食欲の墓^{注1}に近いところにあります。この場所に人が来ると、私たちと一緒にいた聖者が勧めてくれたように、ここから初めて神の山を仰いで、祈りを捧げるのが習慣になっています。そこで私たちもそうしました。私が巨大なと言った谷を通してここから神の山まではおそらく全部で4マイルぐらいでしょう。

2 その谷は神の山の山腹の下に広がっており、とても大きい谷です。それは私たちが見る限り、あるいは案内人が言うところでは、おそらく長さ16マイル、幅4マイルぐらいでしょう。私たちは(聖なる)山に入るためには、この谷を渡らなければなりません。ここは巨大で平坦な谷で、ここでイスラエルの人々が聖なるモーセが神の山に登り40日40夜そこにいた時^{注2}に滞在したところです。ここはまた小牛(の像)が作られた^{注3}谷であり、その場所は今でもわかるようになっています。なぜなら大きな石がその場所に建てられているからです。この谷はその端に、聖なるモーセが姑の家畜に草を食べさせていたときに二度にわたり神が燃える芝の中から話しかけられた^{注4}場所があるところでもあります。私たちの旅程は、まずはそこから見えていた神の山に登ることでした。というのは私たちが来た側からの方が、上りは楽でしたから。そしてそこから再びあの谷の端、つまり芝のあった所に下りることになっていました。なぜな

らそこからは神の山からの下山が楽だったからです。そこで私たちは神の山を下りながら、見たいと思っていたすべてのものを見て、芝のあるところへ行き、そこから長く横たわる谷の真ん中をずっと通って、私たちにその谷で聖書に書かれている場所を一つ一つ見せてくれた神の（案内）人とともに私たちの行路に戻ることにして、そのとうりに実行しました。そこで私たちはパランから来るときに祈りを捧げた所から出発して、谷の端を真ん中を通して横切り、神の山に近付くように道をとりました。ところでその山は周囲から見るとまったく一つに見えるのですが、中に入ると幾つにもなっています。しかし全体で神の山と呼ばれています。聖書にあるように頂上に神の栄光が下った^{注5} 場所がある山はそれらすべての真ん中にあるに際立っています。そして周りにあるこれらすべての山々は非常に高く、私が今まで見たことがないほどです。しかし神の栄光が下ったその真ん中の山はそれらすべてよりもずっと高く、私たちが登ってみると、高いと思っていたそれらの山々は全くすべて、はるか私たちの下にあり、小さな丘のようでした。まったく驚くべきことであり、神の恩寵がなければ起りえないことだと思うのですが、その真ん中の山は他のすべての山よりも高く、特にシナイ山と呼ばれており、そこに神の栄光が降ったのですが、その山は登る前にその麓まで行かないと見えないのです。一方願いがかなって下山すると真向いに見えるのです。これは登る前には起らないことです。このことは神の山に来る前にすでに修道士たちから聞いて知っていましたが、来てみてはっきり分かりました。

3 私たちは土曜日夕刻山に入りました。いくつかの庵の所にくると、そこに住んでいる修道士たちが非常に親切に迎えてくれ、大いに歓待してくれました。そこには司祭のいる教会があったからです。そこで私たちはその夜はそこに泊り、日曜日早朝そこに滞在していたその司祭や修道士たち

と山を一つ一つ登り始めました。その山々は、よく言われるようにカタツムリのように周りを回ってゆっくりゆっくり登のではなく、壁のように真っすぐ登るので大変な苦勞でした。そしてその真ん中の山、つまり本来のシナイ山^{注6}の麓に着くまで山を一つ一つ真っすぐ下りなければなりませんでした。こうして、我らの神キリストの御意志により、同行の聖者たちの祈りに助けられて、徒歩で登らなければならなかったので非常に苦勞して「進みました」。輿に乗って登ることはまったく不可能でした。しかし苦しさは感じられませんでした。神の御意志により私たちが持っていた願いが叶えられるのが分かっていたので苦しさは感じられなかったのです。そこで第4時^{注7}に私たちは神の聖なるシナイ山の頂上に着きました。そこは法が与えられた所、つまり山が煙っていた日に主の栄光が降った所^{注8}です。その場所に今は大きくはない教会が建っています。なぜならその場所自体、つまり山頂が広くはないからです。しかしその教会はそれ自体非常に美しいものです。神の御意志により頂上に登り、その教会の入り口に着くと、庵から司祭が出てきて迎えてくれました。彼はその教会に派遣されている高潔な老人で、幼い頃からこの地で隠者と呼ばれている修道士でした。要するに、彼はこの地にいることがふさわしい人なのです。そこではさらに他の司祭たちばかりでなくその山の傍に留まっていたすべての修道士が出迎えてくれました。彼らはつまり弱さや年令に妨げられなかった人々なのです。しかしその真ん中の山の頂上にはだれも住んでいません。そこには教会が一つと聖なるモーセが留まった洞窟があるだけだったからです。そこでモーセの書からその箇所がすべて読まれ、習慣に従いミサが挙げられ、私たちは聖体を拝領しました。私たちが教会を出るやいなやその地の司祭たちがその山で取れる果物の形をしたパンを私たちに下さいました。なぜなら聖なる山シナイ山は石だらけで灌木もない程ですが、下の山裾辺りには、つまり真ん中の山の裾、あるいはその周りにある

山々の裾辺りにはわずかな土地があるからです。そこで聖なる修道士たちは入念に藪を植え、修道院の周りにも小さな果樹園や耕地を作っています。彼らはその山の土地から手ずから作ったいくらかの果物を得ているようです。そこで私たちが聖体を拝領し、聖なる彼らからパンをいただき、教会の入り口から外に出たあと、私は彼らにそれらの場所を一つ一つ見せてくれるように頼んでみました。すると聖なる彼らはすぐに見せてくれました。彼らは聖なるモーセが人々の罪の故に前の板を壊した^{注9}後で、もう一度それをもらうために再度神の山に登ったときに^{注10}滞在した洞窟を私たちに見せてくれました。さらに私たちが望んだ他の場所はどこでも見せてくれようとし、そしてまた彼らが非常に良く知っている所も私たちに見せてくれようとししました。尊敬する姉妹たちよ、あなたたちに知ってもらいたいのですが、私たちのいる所から、つまり周りに教会の壁がある所、つまり真ん中の山の頂上からは、その近くにあり、私たちが最初にやっと登った山々が非常に下に見えるので、それらは小さい岡のようでした。もっともこの真ん中の山がそれらよりもずっと高くなければ、それらは私がこれまで見たことがないと思えるほど高かったのですが。エジプト、パレスチナ、紅海そしてアレクサンドリアに続くパルテニア海^{注11}、さらに広大なサライセン人の土地などがそこからは私たちのほるか下方に見えたので、ほとんど信じられないくらいでした。しかし聖者たちはそれらを一つ一つ私たちに示してくれました。

4 そこで私たちに登山を促したすべての願望が叶うと、私たちが登った神の山の頂からそれに連なる別の山の方に下り始めました。それは「ホレブで」^{注12}と記されている所で、そこには教会があります。なぜならこれがホレブ山で聖なる預言者エリヤがアハブ王の前から逃げてきた時^{注13}に留まった所で、列王紀の記述によると神が彼に、「エリヤよ、ここで何を

しているのか」と話しかけられた所でもあります。今日でも聖なるエリヤが隠れていた洞窟が、そこにある教会の入り口の前にあります。さらにそこには、聖者たちが私たちに一つ一つ教えてくれたところによると、聖なるエリヤ自身が神に捧げものをするために建てた石の祭壇があります。そこで私たちはその場所で捧げ物をして熱心に祈り、列王紀からその箇所を朗読しました。というのは、私たちは行きたいと思っていた所ではどこに行っても、聖書の該当する箇所を読むことにしていたからです。そこでその場所で捧げ物をしてから、私たちは司祭や修道士たちが言うように、そこから遠くない所にある別の場所に再び登りました。つまりそこは聖なるモーセが神からイスラエルの人々への律法を受けた時に聖なるアロンが70人の老人と立っていた^{注14}所です。そこには建物はありませんでしたが巨大な岩があり、その上にはこれらの聖者たちが立っていたと言われる円形の平らな場所がありました。そしてその中程に石で作った祭壇のようなものがありました。その場所でモーセの書^{注15}のその箇所が朗読され、その場にふさわしい詩編が読まれました。このようにして祈りを捧げた後、私たちはそこから下りました。

さて、第8時ごろになっていたでしょうか、前日私たちが登った山を下りきるにはまだ3マイルありました。しかし私たちは前述のように入ったと同じ所から出る必要はありませんでした。なぜなら私たちはすべての聖なる場所を巡り、そこにある庵はどんなものでも見て、前述のようにあの谷の端、つまり神の山の下に横たわる谷の端に出る必要があったからです。ところで私たちがその谷の端に出る必要があったのは、そこには聖者たちのきわめて多くの庵があり、さらに柴のある所には教会があるからです。その柴は今日も生きており、芽を吹いています。このようにして神の山を下り、柴のある所に着いた時には第10時頃になっていたでしょう。これが上述のように、そこから主が火の中でモーセに語りかけた柴です。この

場所が、谷の端にあって非常に多くの修道院と一つの教会がある所です。その教会の前にはすばらしい庭があり、極めて良質で豊富な水を湛えています。そしてこの庭にその柴があります。さらにその近くにあり、「あなたの履物のひもを解きなさい、云々」と神が聖なるモーセに言われた^{註16}時に彼が立っていた所が示されました。私たちがそこに着いたのはすでに第10時でした。そこですでに夕方になっていたので、私たちは捧げ物をするできませんでした。しかし教会で、さらに柴の近くにある庭でも祈りが捧げられました。そして習慣に従ってモーセの書のその箇所が読まれました。このようにして、夕方になっていたので私たちは聖者たちとともにその場で、その柴の前の庭で軽い食事をとり、そこで泊まりました。次の日私たちは早起きして司祭たちにその場所で捧げ物ができるように頼み、そのようにしました。

5 私たちの旅程は長く延びる谷の真ん中を、つまりイスラエルの人々がモーセが神の山に登って下りて来る間滞在していた前述の谷を通って行くことになっていたのも、聖者たちは、私たちが谷をずっと通る間、一つ一つの場所を必ず説明してくれました。実際、そこで私たちが夜を過ごし、そこから神が火の中で聖なるモーセに話しかけられた柴を見た谷の突端で、私たちはまた神が聖なるモーセに、「あなたの履物の紐を解きなさい。なぜならあなたのいる所は神聖な場所だから」と言われた^{註17}時に柴の前方に彼が居た場所も見ました。そして私たちが柴のある所から出ると、聖者たちは私たちに他の場所ももらさず見せてくれました。彼らはモーセが山へ行っている間、イスラエルの人々の野营地があった場所を見せてくれました。さらに小牛（の像）が作られた^{註18}場所も見せてくれました。そこには現在でも大きな石が建てられています。... 私たちが進んでいくと、真向いに谷全体を見渡す山頂が見えました。そこから聖なるモーセはイス

ラエルの人々が小牛（の像）を作った時に踊りを踊るのを見たのです。彼らはまた聖なるモーセがヌンの子ヨシュアと共に山から下りて来た場所で巨大な岩を見せてくれました。その岩にモーセが怒って持っていた板を叩きつけた^{註19}のです。さらにいかにして各々がその谷に住まいを建てたのか示してくれました。その住まいの土台は今日なお残っており、それがどのようにして石で円形に作られたのかも教えてくれました。さらに聖なるモーセが山から戻った時にイスラエルの人々に住まいの戸口から戸口へ走り回るように命じた^{註20}場所も見せてくれました。彼らはまたアロンが作った小牛（の像）が聖なるモーセの命令で燃やされた^{註21}場所も見せてくれました。さらに出エジプト記に書かれているように聖なるモーセがイスラエルの人々にそこから水を飲ませた急流^{註22}も見せてくれました。さらに70人の長老がモーセの霊を受けた^{註23}場所も見せてくれました。そしてイスラエルの人々が食物に欲をだした^{註24}場所も見せてくれました。さらに彼らは火事と呼ばれている場所を見せてくれました。なぜなら野営地の一部が燃え、その時聖なるモーセの祈りによって火が消えた^{註25}からです。さらに彼らはマナとウズラが降ってきた^{註26}場所も見せてくれました。このようにして、モーセの聖なる書にこの場所、つまり神の山、聖なるシナイ山の麓に横たわると私が前に述べたこの谷でなされたと記されていることが、一つ一つ私たちに示されました。それらを逐一すべて書くには長すぎてとてもそんなには記憶に収めきれなかったでしょう。しかしあなた方がモーセの聖なる書を読めば、そこでなされたすべての事がもっと良くわかるでしょう。この谷はイスラエルの子らがエジプトの地を出て一年たって過ぎ越しの祭りが祝われた^{註27}所です。なぜなら、イスラエルの人々がしばらくの間、つまり聖なるモーセが神の山に登り、最初にそして再度下りてくる間この谷に留まったからです。そしてまた幕屋が作られ、神の山で示された事が一つ一つなされる間、再び長期間この谷に留まったのです。

さらにモーセによって初めて幕屋が建てられ^{注28}、神が山でモーセにするように命じた事がすべてなされた場所が私たちに示されました。私たちはまたその谷の端で欲望の墓を見ました。その場所というのは、私たちが再び私たちの旅程に戻った場所です。そこは私たちがその大きな谷から出て、前述の山々の間を通して来た道に戻った場所でした。さらにその日私たちは他の極めて聖なる修道士たちに会いに行きました。彼らは高齢のため、あるいは体が弱いために捧げ物をしに神の山に行くことができなかったのですが、到着した私たちを非常に親切に自分たちの庵に迎えてくれました。このようにして私たちが望んでいたすべての聖なる場所やイスラエルの人々が神の山への行き来の時に通ったすべての場所を見て、さらにそこに住んでいる聖者たちにも会ってから、私たちは神の名においてパランに戻りました。私は常にすべてにおいて神に感謝すべきなのですが、私には値しないすべての場所を巡り歩くために神がこの卑しく取るに足らない私にお与え下さったこのようなお恵みについては触れないことにします。さらに私は、この卑しい身を喜んで庵に迎えてくれたり、あるいは私が聖書に従って見たいと思っていたすべての場所にちゃんと連れていってくれたあのすべての聖者たちに感謝する術を知りません。その上、神の山やその周囲に住んでいる聖者のうち非常に多くの人々、少なくとも体力がある人々が、私たちをパランに連れていってくれました。

6 このようにしパランに着くと、そこは神の山から35マイルのところにあったのですが、私たちは休息のために2日間そこに逗留しなければなりませんでした。三日目私たちは早出してパランの砂漠にある宿場に再びやって来ました。そこは前に述べたように来るときに私たちが逗留した所^{注29}です。翌日そこで再び水を補給して山の間を少し進んで、私たちは海辺の宿場に着きました。そこは旅人が山間から出て再び海辺の道を進み始

める所です。海辺ではありますが突然波が動物の行く手をさえぎったかと思えば、突然海から100歩、200歩、時にはさらに500歩以上も離れて砂漠の中に行くことになります。なぜなら、内部では道はなく、一面砂の砂漠だけだからです。パランの人々は自分たちのラクダを連れて歩く習慣があるのですが、場所ごとにそれを辿っていけるように印を付けて行きます。このようにして彼らは昼間は進みます。夜になると今度はラクダがこの印を目あてに進むのです。要するに、この土地では習慣により、他の人がちゃんとした道のあるところを歩くよりも、パランの人々は夜にもっと巧みにそして安全に歩くことができるのです。私たちは往路入山するときに通ったと同じ場所に帰路下山して来ました。このようにして私たちは再び海に辿り着きました。ところでイスラエルの人々は神の山シナイからここに戻るときに、行きと同じ所を通して戻ってきました。つまり私たちが山から下りて再び紅海に出た場所に戻ってきたのです。そしてそこから私たちは来たのと同じ道に戻り、イスラエルの人々は同じ場所から、聖なるモーセの書に書かれているように、彼らの旅^{注30}を続けたのです。私たちは行きと同じ道、同じ宿場を通してクレスマに戻りました。クレスマに再度やって来ると、私たちは砂の砂漠をあまり歩きすぎたのでそこで再び休息を取らなければなりませんでした。

7 私は確かにゴシェンの地を、そこから初めてエジプトに行ったので知ってはいましたが、ラメセスを出たイスラエルの人々が紅海岸に、今はそこにある城のためにクレスマと呼ばれていますが、そこに着くまで途中通ったすべての場所を良く見るために私たちはクレスマからゴシェンの地、つまりはその地にあるアラビアと呼ばれている町に行こうと思いました。というのは、この事からこの地域がアラビアの地、ゴシェンの地と呼ばれているからです。それはエジプトの一部ですが、(残りの)全エジブ

トよりはるかに良い所です。^{注31} クレスマつまり紅海岸からアラビアという町まで砂漠の中に四つの宿場があります。砂漠のなかではありますが、宿場ごとに兵士と将校のいる駐屯地があり、彼らが常に私たちを宿営から宿営まで導いてくれました。その道行きの間、私たちと一緒にいた聖者たちが、つまり司祭や修道士たちですが、私が聖書を読んで常に見たいと思っていた場所を私たちに一つ一つ見せてくれました。なぜならあるものは私たちの行く手の左側に、またあるものはあるいは右側に、さらには道から遠くに、あるいは近くにあったからです。みなさんに信じていただきたいのですが、私の知り得た限りでは、イスラエルの人々もこのようにして歩いたのです。ある時は右に行き、またある時は左に戻り、再び前進したかと思えばまた戻り、このようにして紅海に辿り着くまで旅を続けたのです。私たちはエパウレウムを見せてもらいました。しかし向い側から。そして私たちはマグダルムへ行きました。そこには今は兵士を従えた将校がいる宿営があり、ローマの権威の下で指揮しています。彼らは習慣に従って私たちをそこから他の宿営に連れていってくれました。私たちはバアル・ツェフォン^{注32}という場所を示され、実際そこへも行きました。なぜならそこは前に述べた山の際の紅海岸にある平地で、そこでイスラエルの人々がエジプト軍が背後から迫るのを見て叫び声をあげた^{注33} 所だからです。私たちは書かれている通り砂漠の際にあるオトン（エタム）^{注34}を見せてもらいました。そしてまたスコト^{注35} もを見せてもらいました。スコトは谷の真ん中にある小さな岡で、そのかたわらにイスラエルの人々が野営地を建てた所です。なぜならここが、過ぎ越しの定めが授けられた^{注36} 所だからです。ピトムはイスラエルの人々が建てた町ですが、途中私たちがサラセン人の地を離れてエジプト領に入った所で私たちに示されました。現在ピトムは要塞になっています。ヘロウムは創世記に書いてあるように^{注37} ヨセフがやって来た父ヤコブに出会った当時は町でしたが現在は村です。しかし大

きいので、私たちは小さな町と言っています。そこには教会や殉教者記念堂や聖なる修道士たちの極めて多くの庵があります。私たちはそれらを一一つ見るために、私たちの身についた習慣に従って下りて行かなければなりません。その村は現在はヘロと呼ばれています。ヘロはゴシェンの地から16マイルのところであり、エジプト領内にあります。そこはナイル河の支流が流れているので非常に快適です。このようにして、私たちはヘロを出てアラビアと呼ばれている町に着きました。それはゴシェンの地にあります。それ故、ファラオがヨセフに、「エジプトの最も良い土地、つまりゴシェンの地、アラビアの地にお前の父上、お前の兄弟たちを住まわせるがよい」と言ったと書かれています。^{註38}

8 アラビアという町から4マイルのところからラメセスがあります。私たちはアラビアの宿場に行くのにラメセスの真ん中を通して行きました。ラメセスの町は現在は平原になっていて住居など一つもありません。たしかに周囲は巨大で、多くの建物があったようです。なぜならその廃墟は崩れていて、今日では際限なく広大に見えるからです。そこには今はテーベの巨大な石以外には何もありません。その石には二つの大きな像が彫られており、聖者たち、つまりモーセとアロンのものだと言うことです。イスラエルの人々が彼らを記念してそれらの像をそこに彫ったようです。さらにそこには族長たちによって植えられたと言うイチジクの木があります。それはすでに非常に古く、それ故極めて小さくなっていますが、今日まで実をつけています。病気の人は誰でも、そこに行って若芽を摘めば効能があるのです。このことはアラビアの聖なる司教が言ったのでわたしたちは知りました。彼が私たちにその木の名前とそしてそれをギリシャ語で何と言うかを教えてくれました。それはdendros alethiae^{註39}で、私たちの言葉では「真実の木」です。その聖なる司教が私たちをラメセス

に出迎えてくれました。彼はすでに老齡の非常に敬虔な元修道士で愛想が良く、巡礼者たちにとても良くしてくれ、聖書に精通しています。彼がわざわざ私たちをそこに出迎えてくれたとき、そこにあるものを一つ一つ見せてくれ、あのイチジクの木のことや私が言ったあの像のことも話してくれました。その聖なる司教は私たちに次のようなことも話してくれました。ファラオはイスラエルの人々が彼のもとを去ったとき、彼らに襲いかかる前に全軍を率いてラメセスに入り広大なラメセスをすべて焼き払い、それからイスラエルの人々を追跡したのです。

9　ところで、私たちがアラビアの宿場に着いた日が偶然、至福なる御公現の祝日の前日という嬉しい事がありました。その日には教会で徹夜課が行なわれることになっていたのです。そこでその地の聖なる司教は私たちを約二日間そこに留め置いてくれました。彼は聖なる、そして真に神の人で、すでに私がテーベへ行った時から良く知っていました。その聖なる司教は元修道士で、幼少の頃より修道院で育てられました。それ故聖書に精通しており、私が前に述べたように全生涯正しく生きてきた人です。その時から、私たちが怪しげな場所を通る間ローマの権威で私たちを保護してくれた兵士たちを帰しました。道はすでにエジプトに入り公道になりアラビアの町を通っており、テーベからペルシウムに続いているからです。それ故もう兵士たちを煩わせる必要がなくなったのです。私たちはそこを出発してずっとゴシェンの地を通して、葡萄酒を産出する葡萄園とバルサムを産出する葡萄園の間を絶え間なく通って、また果樹園、良く耕された畑、非常にきれいな庭園の間を通して、またかつてはイスラエルの人々の村であった極めて豊かな領地を通してナイル川沿いに絶えず進んで行きました。これ以上素晴らしいことがあるでしょうか。私はゴシェンの地よりも美しい土地をどこにも見たことがないと思います。このようにして私た

ちはアラビアという町からずっと二日間ゴシェンの地を通して聖なるモーセが生まれたタニスの町に着きました。かつてファラオの都であったのはこのタニスの町^{注40}です。前に述べたように私はそれらの場所をすでに、つまりアレクサンドリアかテーベに行ったときに、知ってはいましたが、イスラエルの人々がラメセスを出て聖なる神の山シナイに着くまで歩いたそれらの場所をよく知りたいと思ったので、再びゴシェンの地に、さらにそこからタニスに戻る必要がありました。タニスを出ると、私はすでに知っている道を通してペルシウムに着きました。そこを再び発ってすでに辿ったエジプトの宿場を一つ一つ巡りパレスチナの国境に着きました。そしてそこから我らの神キリストの名において私はパレスチナを二三泊して進み、アエリア^{注41}つまりエルサレムに戻って来ました。

10 それから幾らかして神のお計らいによって、私は再びアラビアまで赴き、ネボ山に登りたいという気になりました。そこは神が次のように言ってモーセに登るように命じた所です。「エリコの向かいのモアブの地にあるアバリム山、すなわちネボ山に登りなさい。そしてカナンの地を見なさい。そこをイスラエルの人々に与えます。あなたは自分の登ったその山で死ぬでしょう^{注42}」このようにして自分に望みをおく者をお見捨てにならない我らの神イエスは今回も私の望みを叶えてくださいました。そこでエルサレムを発って、聖者たち、つまりエルサレムの長老や助祭たち、それから幾人かの兄弟、つまり修道士達と旅をして私たちはヨルダン川の地までやって来ました。そこはヨシュア書に書いてある通りヌンの子聖なるヨシュアがイスラエルの人々をヨルダン川を渡したときに^{注43}彼らが通った所です。私たちはルベンとガドの子らとマナセ族の半数がエリコ側の河岸で祭壇を設えた^{注44}わずかに高くなっている場所を見せられました。私たちは川を渡りリビアダ^{注45}という町に着きました。それはイスラエル

の人々が当時野営地を設けた平地にありました。イスラエルの人々の野営地と彼らが滞在した住居の土台が今日でもその場所に見えます。その平地はヨルダン河畔アラビア山地の麓にあって限りなく広がっています。そこは次のように書かれている場所です。「そしてイスラエルの人々はモアブの地アバリム山、ヨルダン川が流れる地でエリコを前にしてモーセのために40日間泣いた」^{注46}そこはまたモーセの死後直ちにヌンの子ヨシュアが知恵の霊に満たされた^{注47}所でもあります。書かれているようにモーセが彼のうゑに手を置いたからです。そこはモーセが申命記を書いた^{注48}所でもあります。さらにそこが、モーセが申命記に書かれている歌の言葉を終わりまでイスラエルの全会衆の耳に語った^{注49}所です。そしてそこが神の僕である聖なるモーセが死を前にしてイスラエルの人々を一人ずつ順番に祝福した^{注50}所です。そこで私たちがその平地に着くと、その場所へ行き、そこで祈りを捧げ、申命記のある箇所を読みました。そこではモーセの詩だけではなく、イスラエルの人々に彼が与えた祝福も読まれました。そして朗読の後で再び祈りを捧げ、神に感謝してそこを立ち去りました。というのは、望んでいた場所に着くことができると、まず祈りを捧げ、聖書の該当箇所を読み、その場にふさわしい詩編を一篇唱え、再び祈りを捧げるのが私たちの常々の習慣になっていたからです。私たちは望んでいた場所に到達できたときにはいつも、神の御意志によりこの習慣を実行しました。このようにして、始めた事を完成すべく、私たちはネボ山に着くために急ぎ始めました。途中でその地、つまりリビアドの司祭が私たちに（色々と）教えてくれました。私たちは彼がその地を良く知っているのです宿場から一緒に来るように頼んであったのです。その司祭は私たちに次のように言いました。「もしあなたたちが岩からほとばしる水、つまりモーセが乾いたイスラエルの人々に与えた水^{注51}を見たいなら、見るができますよ。でも大体6マイルぐらいのところで道を逸れるという労を厭わなければで

すが」彼がそう言うと、意欲満々の私たちは行くことにし、ただちに道を逸れて私たちを案内してくれるその司祭に続きました。その場所には小さな教会が建っています。それはネボ山の麓ではなく、もっと内側の山の麓にあるのですが、ネボ山から遠くないところにあります。そこでは非常に多くの修道士たちが真に聖者のように暮らしており、当地では人々は彼らのことを行者と呼んでいます。

11 これらの聖なる修道士たちは私たちを大歓迎してくれました。というのも挨拶のために私たちが（庵に）入ることを許してくれたのですから。私たちが彼らの庵に入って彼らと一緒に祈りを捧げると、歓迎する人々に与える習慣に従って彼らは私たちに聖パンをくれました。さてそこでは、教会と庵の間の中程で、岩から豊富で、とても美しく、澄んでいて、最高の味の水が流れ出ています。そこで私たちはそこに住んでいる修道士たちにこんなにきれいで、このような味のする水は何なのか聞いてみました。すると彼らは、「これは聖なるモーセがこの砂漠でイスラエルの人々に与えた水です」と答えました。それで習慣に従ってそこで祈りを捧げ、モーセの書から朗読を行い、さらに詩編を一篇唱えてから、私たちは一緒に来た聖なる司祭や修道士たちと共にネボ山に出発しました。その水の近くに住んでいて労を厭わない聖なる修道士たちの多くが私たちと共にネボ山に登ってくれました。このようにして私たちはその場所を登ってネボ山の麓に着きました。ネボ山は非常に高かったのですが、その大部分は驢馬に乗って登ることができました。しかし一部は非常に険しく、私たちがそうしたように徒歩で苦労して登らなければなりませんでした。

12 私たちはこのようにしてネボ山の頂上に着きました。その頂上には現在大きくはない教会が建っています。その教会の中で、説教壇のある所

に私は墓と同じくらいの大きさのちょっと高くなっている場所を目にしました。そこで私は聖者たちにこれは一体何なのか聞いてみました。すると彼らは次のように答えました。「ここには聖なるモーセが天使によって葬られています。聖書にあるように彼の墓は誰も知りません。^{注52} 彼が天使によって葬られたのは確かです。彼が埋葬されている墓は今日まで公開されていません。^{注53} 実際私たちにはここに住んでいた老人たちによってモーセがどこに埋められたかが示されました。そこで私たちもあなたがたにお示します。そしてその老人たちもまた、彼らの祖先からそのことを伝えられたと言っていました。」そこでまもなく祈りが捧げられ、私たちが聖なる各々の場所で順序に従って行なうことにしていたすべてのことが、ここでも行なわれました。そこで私たちは教会から出ようとしていました。その時この土地を知っている人たち、つまり長老や聖なる修道士たちが私たちに言いました。「もしあなたがたがモーセの書に書かれている場所を見たいなら、外へ出て教会の入り口のところへ行きなさい。その一番高くなっている所から見えますから、気をつけて見なさい。私たちがそこから見える場所が何なのか一つ一つあなたがたに教えてあげましょう」そこで私たちは非常に喜んですぐに外へ出ました。その教会の入り口からは、ヨルダン川が死海に注ぐ場所が見えました。そこは私たちの立っている所から真下に見えたのです。正面にはヨルダン川のこちら側にあるリビアダだけでなくヨルダン川の向こう側にあるエリコが見えました。私たちが立っていた場所、つまり教会の入り口の前というのはそれほど高いところにありました。そこからはさらに約束の地パレスチナの大部分も見えました。また目の届く限りではありますが、ヨルダンの地もすべて見えました。左側にはソドム^{注54} 人の全土とツォアル^{注55} が見えました。そのツォアルだけがあの五つの町のなかで今日まで残っています。^{注56} 確かにそこには記念碑があります。その他の町については、灰になってしまったので廃墟の混

乱以外は何も見えません。さらに私たちにロトの妻の石碑のある場所が示されました。その場所は聖書にも書かれています。^{注57}でも尊敬する夫人たちよ、私を信じてください。あの柱はもう見えないのです。その場所だけが示されているのです。あの柱は死海に没したと言われています。私たちはその場所をよく見たのですが、柱などは何も見えませんでした。このことに関しては偽れません。なぜならその地、つまりツォアルの司教が私たちにその柱が見えなくなってもう数年経つと言いましたから。その柱が建っていた所はツォアルから6マイルぐらいのところにあったのですが、いまは全部水没してしまっています。それからまた教会の右側から、しかし外側から進んでいくと、そこから正面に二つの町が私たちに示されました。つまり現在はエクセボンと呼ばれている、アモリ人の王シホンの町であったヘシュボン^{注58}と、現在はサスドラと言われているバシヤンの王オグ^{注59}の町です。また同じ場所から正面にエドムの国の町であったフォゴルが私たちに示されました。私たちが見たこれらの町はすべて山の上にあります。しかし下の方、ちょっと低いところに平地があるのが私たちに見えました。その時私たちは、聖なるモーセとイスラエルの人々がこれらの町に戦いを挑んだときには、彼らはそこにすでに陣営を建てていたと聞かされました。確かにそこには陣営の跡が見えました。私が左側にあると言った、死海を見渡すに山の方角に、かつてアグリスペクラと呼ばれた非常に切り立った山^{注60}が私たちに示されました。これは聖書にあるようにベオルの子バラクがイスラエルの人々を呪うために占い師バラムを連れてきました^{注61}が神がそれを許さなかった山です。このようにして私たちは望むものすべてを見てから、神の名においてエリコと今まで通ってきた道をずっと通ってエルサレムに帰りました。

げる目的で訪れるためにさらにアウシディス地方^{注62}へ行こうと思いました。というのは多くの聖なる修道士たちが、祈る目的で聖なる場所を訪れるためにそこからエルサレムへ来るのを見ていたからです。彼らは自分たちの故郷についていろいろと説明して、私にそこにも行けるように我が身に苦勞を科すことを望ませたのです。もっとも苦勞などと言うことは、人が自分の望が叶えられるのを見た時に言えるのですが。そこで私は聖者たちと共にエルサレムを出発しました。彼らは道中私の御供をしてくれました。彼らもまた祈るためにそこに行こうとしていたのです。エルサレムからカルネアスまで行くあいだ八つの宿場を通ります。カルネアスは現在はヨブの町と呼ばれていますが、かつてはディンハバ^{注63}と言われており、イドマヤとアラビアの境にあるアウシディスの地にあります。その道すがら私はヨルダン河岸でとても美しい魅惑的な谷を見ました。それはぶどう畑と木々に富んでいました。というのはそこは多量の非常に良質の水があったからです。その谷には現在セディマ^{注64}と呼ばれている大きな町がありました。平地の真ん中にあるその町には、ちょうど中程に通常の墓、しかし大きめの墓のように作られたそれほど高くない小山がありました。その頂上には教会があり、小山の麓には周囲に昔の大きな土台が見えています。現在でもその町にはかなりの廃墟が残っています。私はこのように素晴らしい場所を見て、こんなに美しい所はいったい何なのでしょうと尋ねました。すると次のような答えが返ってきました。「これはメルキゼデク王の町で、かつてはサレムと呼ばれていましたが、今は語形が崩れて町はセディマと呼ばれています。町の真ん中にある小山の頂上に見える建物は教会で、今はギリシャ語で・・・と呼ばれており、メルキゼデクの建てたものです。というのはここが聖書にあるように、メルキゼデクが神に純粋な犠牲、つまりパンと葡萄酒を捧げた^{注65}所だからです」

14 私がこの事を聞くと私たちはすぐ乗り物の動物から降りました。するとそこにその地の聖なる司祭や聖職者たちが出迎えてくれました。彼らは直ちに私たちを受け入れて、教会まで登って連れていってくれました。私たちがそこに着くとすぐに、習慣に従ってまず祈りが捧げられました。それから聖なるモーセの書にあるその個所が読まれ、さらにその場所にふさわしい詩編が一篇唱えられ、再び祈りを捧げて私たちは下りました。私たちが下りてくると、すでに年老いて、聖書に精通しているその聖なる司祭、つまり修道士をした後その場所を監督している司祭が私たちに話をしてくれました。そして非常に多くの司教たちが、私たちが後から知った限りでは、彼の生き方についてすばらしい証言をしているのです。というのは彼について、聖なるアブラハムがやって来た時、聖なるメルキゼデクが最初に神に純粋な犠牲を捧げた場所を監督するのにふさわしい人だと言っていたからです。前に述べたように私たちが教会から下の方へ下りてくると、その聖なる司祭が私たちに言いました。「あなたがたが見ている小さな岡の周りにあるこの土台がメルキゼデク王の宮殿のものです。なぜなら今日に至まで、すぐ傍に家を建てようとしてその土台に近付くと、しばしばそこに銀や銅の器の小片が見つかるからです。ヨルダン川とこの町の間を通っているのが見えるあの道は聖なるアブラハムが民々の王ケドルラオメルを殺してソドムに帰る時に通った道で、サレムの王である聖なるメルキゼデクが彼を出迎えた^{注66}所でもあります」

15 その時私は聖ヨハネがサリムの傍のアエノンで洗礼を受けた^{注67}と書いてあるのを思い出して、その場所がどのくらい離れているのか彼に尋ねました。するとその聖なる司祭は次のように答えました。「ここから200歩ぐらいの所にあります。もしお望みでしたら、これからすぐ歩いてあなたがたをそこへお連れしましょう。この町であなた方が御覧になっ

ているこんなに多量でこんなに澄んだ水はその源泉から来ています」そこで私は彼に感謝し、そこに私たちを連れていってくれるように頼むと、そうしてくれました。そこですぐに私たちはきわめて美しい谷をずっと通って徒歩で彼と共に行き、非常に美しい果樹園に着きました。そこで彼は私たちに中程にある極めて良質で非常に澄んだ水の源を見せてくれました。それは一挙に完全な小川となって流れだしています。その源の前には池のような所があり、そこで洗者聖ヨハネが聖務を司っていたようです。その時その聖なる司祭が私たちに言いました。「今日でもこの果樹園は正にギリシャ語で *cepos tu agiu iohanni*^{注68} と呼ばれています。つまりそれはあなた方がラテン語で *hortus sancti Iohannis* (聖ヨハネの庭) と言うものです。多くの兄弟たち、聖なる修道士たちがいろいろな所からそこで沐浴するためにやって来ます」その源のある所で再び、他の場所におけると同じように、祈りが捧げられ、聖書が読まれ、さらにふさわしい詩編が唱えられました。そして聖なる場所に来たときに行なうのが私たちの習慣になっていることを、そこでも一つ一つ行ないました。聖なる司祭はさらに私たちに次のように言いました。「今日でも復活祭の度にこの町、つまりメルキゼデクの建てたと言われるこの教会で洗礼を受けなければならない人は誰でもこの源で洗礼を受けて、早朝にろうそくの明かりで司祭や修道士達と共に詩編や交誦を唱えながら戻って行きます。このようにして洗礼を受けた人はすべて早朝に源から聖なるメルキゼデクの教会まで導かれます」それで私たちは司祭から、つまり洗者聖ヨハネの果樹園から、そして同様にその果樹園に庵を持っている聖なる修道士たちから聖パンを受け取り、つねに神に感謝を捧げて、私たちの旅に戻りました。

んでいくと、というのはその道が当分の間私たちが進む道だったので、突然私たちは聖なる預言者エリヤの、つまりティシュベの町を見ました。そこから彼にはティシュベ人エリヤ^{注69}の名がありました。そこにはその聖者が座した洞窟が今日もあり、そしてそこにはまた士師記に名がある聖なるエフタの墓^{注70}があります。そこでまた私たちは習慣に従って神に感謝を捧げ、旅を続けました。道を進んでいくと、私たちは左側に極めて美しい谷が現われるのを見ました。その谷は巨大でヨルダン川に尽きることのない奔流を送り込んでいます。そしてその谷で私たちはある兄弟、つまり今は修道士になっている人の庵を見ました。そこで私は好奇心が非常に強いので、今聖なる修道士が自分のために庵を造ったこの谷は何なのか尋ねました。というのはそれは理由なしではないと思ったからです。すると私たちが旅を共にしてきたその土地を知る聖者たちが私たちに言いました。「これは、飢饉のあったアハブ王の時代にティシュベ人エリヤが座したコラの谷で、神の命令でカラスが彼に食物を運び、彼はその奔流から水を飲んでいました。^{注71}というのは、この谷からヨルダン川へ流れ出ているのが見えるこの奔流がコラだからです」そこで、私たちが望むものを一つ一つ、それに値しない私たちに見せてくださった神に感謝して毎日の旅を続けました。そして日々道を辿って行くと左手に、そこからは正面にフェニキア地方が見えるのですが、突如長く広がる巨大な非常に高い山が現われました。

1 ページ欠落している

その聖なる修道士である行者は長年砂漠に住んだ後、啓示に従って自分に示された場所を掘ることを当時の司教や司祭達に促すために、移動してカルネアスの町に下りて行かなければならなくなり、そのようにしました。

示された場所を掘っていると洞窟を見つけました。中を百歩ほど進んだ所を掘っていると突然石が現われました。その石を掘り出してみると表にヨブと彫ってあるのが見つかりました。そのヨブのためにその時にこの目の前にある教会がこの地に建てられました。しかし遺体とともに石が他の場所に移されないで、遺骸の見つかったその場所に置かれ、遺骸が祭壇の下に横たわるようにされました。この教会はどの護民官が建てたのか私は知りませんが、今日まで未完成でした。そこで翌朝私たちは司教に捧げ物を供えてくださいと願うと、そのようにしてくれました。私たちは司教の祝福を受けて出発しました。そこでも聖体を拝領し、常に神に感謝を捧げ、三年前来たときと同じ宿場を一つ一つ辿ってエルサレムに戻りました。

17 このようにして神の名においてかなりの時間が経過し、私がエルサレムに来て丸3年経ち、祈るために行った聖なる場所をすべて見たので、帰国したい気持ちになりましたが、神の御意志によりさらにシリアのメソポタミアに赴き、聖なる修道士たちに会いたいと思いました。彼らはそこに大勢おり、言い表わせないほど素晴らしい生活を送っていると言われていました。さらには遺骸がそのまま安置されている使徒聖トマスの殉教記念堂へも、つまりエデッサへも祈るために行こうと思いました。その地へは天に昇った後彼を赴かせると、我らの神イエスが手紙で約束していました。その手紙というのは、伝令アナニヤを介してアブガル王に送ったもので、彼の殉教記念堂があるエデッサの町に大いなる畏敬の念をもって保管されています。どうか信じてほしいのですが、どんなキリスト教徒も聖地、つまりエルサレムまで来て、祈るためにそこへ行かない人はいません。そこはエルサレムから25番目の宿場のある所です。アンティオキアからのほうがメソポタミアは近いので、神の御意志のおかげで私には好都合でした。コンスタンティノーブルに戻るときにアンティオキアを通ることに

なっていたので、そこからメソポタミアに行けるからです。そして神の御意志によりそのようにしました。

18 このようにして我らの神キリストの名において私はアンティオキアを出発し、アンティオキアのあるシリア・ケレム州の幾つかの宿場や町を通ってメソポタミアへ向いました。そしてその州からアウグスト・フラテンシス州に入り、ゲラポリスの町に着きました。これはその州、つまりアウグスト・フラテンシスの首都です。この町は非常に美しく富んでいて、すべてが豊富でしたので、私はそこに留まることにしました。そこからはすでにメソポタミアの地は遠くはなかったのです。それからゲラポリスを発って15マイル目で神の名において私はユーフラテス川に着きました。それについては大河ユーフラテスとまさしく聖書に書かれています^{注72}が、巨大で恐ろしくさえあります。というのはそれはローヌ川と同じくらいの激しさで流れているからです。ただユーフラテスの方がずっと巨大です。そこで船で、それも大きい船で川を渡らなければならなくなり、そこで恐らく半日以上足止めされました。それから神の名においてユーフラテス川を渡り、シリアのメソポタミアの地に入りました。

19 そして再び幾つかの宿場を通って、その名が聖書にあるのを読むことができる町、つまりバタニスに着きました。その町は今日でもあります。というのはそこには真に聖なる司教、修道士、証聖者がいる教会と、かなりの殉教者記念堂があるからです。さらにその町は、司令官がいる軍隊が駐屯しているので、人であふれています。そこから再び出発して、私たちは我らの神キリストの名においてエデッサに着きました。私たちはそこに着くと、直ちに教会と聖トマス殉教記念堂に向かいました。それから私たちは習慣に従って祈りを捧げ、聖なる場所で行なわれることになっている

他のことを行い、さらにそこで聖トマスに関する文章を幾らか朗読しました。ところでそこにある教会は大きく、とても美しく、新しく建てられたもので、誠に神の家にふさわしいものです。そこでは私が見たいと思ったものが多くあったので、三日間滞在しなければなりませんでした。このようにして私はこの町で非常に多くの殉教者記念堂と聖なる修道士たちを見ました。彼らのある者は殉教者記念堂の周りに住んでおり、またある者は町から遠く、辺鄙な所に庵を持っていました。この町の聖なる司教が、非常に敬虔な人物で、修道士でもあり証聖者でもあるのですが、私を快く迎えてくれて言いました。「娘よ、私はあなたが教えのために自分自身にこのような大きな重荷を課し、遠く地の果てからこの地へやって来たのがわかります。そこでもしよければ、ここでキリスト教徒にとって見るのが喜ばしい所ならどんな所へでもご案内しましょう」そこで私はまず神に、それから彼に感謝して、そのようにしていただくよう切にお願いしました。すると彼はまずアブガル王の宮殿へ私を連れていってくれました。そこで彼は私にアブガル王の、人のうわさでは、生き写しの巨大な像を見せてくれました。それは真珠のように輝いていて、大理石でできていました。正面から見ると、そのアブガル王の顔にはこの王が非常に賢く称賛すべき人物であったことがはっきり表れていました。その時聖なる司教が私に言いました。「これがアブガル王です。彼は主を見る前に主を本当に神の子だと信じました。」その傍に同じように大理石でできた像がありました。彼は王の息子のマグヌスのものだと言いましたが、同じようにその顔には優美なところがありました。それから私たちは宮殿の内部に入って行きました。そこには魚で満ちた今まで見ことのないような泉がありました。それらは非常に大きく、非常に澄んでいて、とても美味しい味がしました。その町の中には今は宮殿から流れ出る以外の水はありません。それは大きな銀色の流れのようです。その時聖なる司教が次のようにその泉について私

に話してくれました。「ある時、アブガル王が主に手紙を書いて、主が伝令アナニアを通して王にその書簡にあるとおり返事を出された後、いくらか経ってペルシャ人が来襲し町を包囲しました。しかしアブガルは直ちに主の書簡を持って門のところへ行き、全軍と共に公に祈りました。それから彼は言いました。『主イエスよ、あなたは私たちに敵の一人もこの町に入らないだろうと約束してくださいました。でも御覧ください、今ペルシャ人たちが私たちを攻めています』王がその開いた手紙を持って手を上げてこう言うと、突然暗闇になりました。しかしそれは町の外、ペルシャ人たちの目の前だけでした。彼らは既に町から非常に近く、三マイルの所まで迫っていましたが、すぐに闇の中で非常に混乱して、辛うじて陣営を置いて、三マイルのところで、町全体を取り囲みました。ペルシャ人たちはこのように混乱していたので、その後どの部分から町に侵入したらいいのかわからないで、三マイルのところで周囲を敵に取り囲まれた町を見張っていました。彼らはそれを数か月続けました。やがてこの町にはどうしても侵入できないと分かったと、彼らは町のなかにいる人々を渇きで殺そうとしました。というのは、娘よ、見ての通りこの町を見下ろすあの小山が当時は町に水を供給していたからです。そこでこれを見たペルシャ人たちは町から水を逸らせて、自分たちが陣営を構えている所に流れをもってきました。するとペルシャ人たちが流れを町から逸らせたその日その時、直ちにここに見えるこれらの泉が神の命令でいっせいに吹き出しました。その日からこれらの泉は今日まで神のおかげでここにあるのです。ところでペルシャ人たちが逸らせた水は即座に枯れてしまい町を包囲していた者たちが飲むには一日ももちませんでした。その状態は今日も続いています。というのはそれから以降は今日に至るまでどんな水も出なかったからです。こうして、こうなるだろうと約束した神の命によって彼らは直ちに自分たちの地、つまりペルシャに戻らなければならなかったのです。実際それから敵が来

襲してこの町を攻めようとするたびに、この手紙が持ち出され門のところで読まれました。すると神の命によってすべての敵が直ちに追い返されました」聖なる司教はこうも語りました。「これらの泉が湧き出た所は、以前町中で、アブガルの宮殿の下方に位置し平地だった所です。そのアブガルの宮殿は今見ての通りやや高いところにありました。なぜなら宮殿は建てる時はいつも、かならず高いところに建てるのが当時の習慣だったからです。しかしこれらの泉がそこに湧き出るとまもなくアブガルが息子のマグヌス、つまりその像が父の傍に置かれているのが見えるこの人物のためにその場所にこの宮殿を建てたのです。しかしこれらの泉が宮殿の中に閉じこめられるように(建てました)」聖なる司教はこれらすべてを語った後、私に言いました。「さあ、私が言った手紙を持参した伝令アナニアがくぐった門のところへ行きましょう」それで私たちが門の所へ来ると司教は立ったまま祈りを捧げ、そこで私たちにその手紙を読んでもくれました。それから再び私たちを祝福して、また祈りを捧げました。さらにその聖者は私たちにこうも言いました。「伝令アナニアが主の手紙を持ってこの門から入った日から今日まで、汚れた人間や喪中の人間がその門をくぐらないように、さらに誰かの遺骸がそこを通過して運び出されないように見張りがついています」さらにその聖なる司教は私たちにアブガルや彼の全家族の非常に美しい、しかし旧式に建てられた墓を見せてくれました。それから彼はアブガル王が初めに建てた高いところにある宮殿にも私たちを連れて行ってくれました。そしてさらに他の場所も私たちにを見せてくれました。その上聖なる司教がそこで私たちに読んでくれたアブガルから主への手紙であれ、主からアブガルへの手紙であれ、それらを彼から受け取るのは私にとって非常に大きい喜びでした。私はこれらの写しを故国にもっているのですが、何かが恐らく欠けて故国にもたらされているかも知れないので、そこで彼からそれらを受け取ることが嬉しく思えたのです。というのはここで私が

受け取ったものは実際量がより多かったからです。それ故我らの神イエスがお命じになり私が帰国した暁には、親愛なる夫人たちよ、あなた方もそれを読めることになるのです。

20 このようにしてそこで三日間過ごした後で、私はさらに現在カリスと呼ばれている所まで行かなければなりませんでした。というのはそこは聖書ではハランと言われており、創世記によれば、主がアブラハムに「あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を離れてハランに行きなさい云々」と言われた^{注73} 折り、聖なるアブラハムが居を構えた所だからです。そこ、つまりハランに着くとすぐ私は町のなかにある教会へ行きました。まもなく私は真の聖者で神の人であるその地の司教に会いました。彼は修道士であり証聖者でしたが、まもなく私たちが望んだすべての場所をその地で見せてくれました。というのは彼はすぐに町の外にある教会へも私たちを連れて行ってくれたからです。そこは聖なるアブラハムの家があったところでした。つまり、その教会は聖なる司教が言ったように、同じ土台に同じ石で建てられていたのです。それで私たちがその教会に着くと、祈りが捧げられ、創世記のその箇所が読まれ、さらに詩編が一篇唱えられました。そしてもう一度祈りが捧げられ、司教が私たちを祝福して、私たちは外へ出ました。彼はまた私たちを聖なるリベカが水を汲み出していた井戸^{注74} に連れていってくれました。そして聖なる司教は私たちに言いました。「これが聖なるリベカが聖なるアブラハムのしもべ、つまりエリエゼルの駱駝に水を与えた井戸です」 このようにして彼は私たちに一つ一つ見せてくれました。さて私が町の外にあると言った教会には、尊敬する夫人たち、姉妹たちよ、そこには初めはアブラハムの家があったのですが、今そこには殉教者記念堂が置かれています。つまりヘルピディウスという名前の、ある修道士の記念堂です。さてとても嬉しいことに私たちは殉教の祝日、

つまりその聖ヘルピディウスの祝日である4月23日（5月1日の9日前の日）^{注75}の前日にその地に到着したのです。その日にはあらゆる所から、メソポタミアのすべての領地から、すべての修道士たちが、そして苦行者と呼ばれて孤独のうちに暮らしている老人たちもハランに下りてこなければならなかったのです。それはその地で盛大に祝われるその祝日のためであり、また聖なるアブラハムの記念のためでもありました。なぜならその聖なる殉教者の遺骸が安置されている教会が現在あるところに、彼の住まいがあったからです。そして私たちに望外の嬉しいことが起こりました。そこで聖なる、そして真に神の人であるメソポタミアの修道士たちに会えたのです。さらにその名声や生活が遠くからも聞こえていた人々にも会うことができました。私は彼らにはまったく会えるとは思っていませんでした。それはすべてを授けてくださる神にも私にこの事を叶えてくださることが不可能だったからではなく、私は彼らが、多くの素晴らしいことをする人たちなので、復活祭とこの祭日以外は、自分たちの住んでいるところから下りてこないということを聞いていましたし、上述のこの殉教者の祝日が何月なのか知らなかったからです。このようにして私は神の命によって予期せぬ日にその地に着くこととなったのです。私たちは殉教記念日のためと聖者たちに会うためにそこに二日間留まりました。彼らは歓迎の挨拶をして、とても喜んで私を受け入れて言葉をかけてくれましたが、私には過ぎたことでした。彼らは殉教記念日が終わるとすぐに見えなくなりました。夜になるとまもなく彼らは砂漠をめざし、各々そこに持っている庵に向かったのです。ところでその町にはそこに住んでいるわずかの司祭と聖なる修道士たちを除いては、まったくキリスト教徒を見かけませんでした。至る所異教徒です。さて私たちは聖なるアブラハムの記念として、以前彼の家が場所を非常に敬意をもって見てますが、異教徒たちもまた町から約1マイル離れているナホルとベトエルの墓のある場所を非常な

敬意をもって眺めています。その町の司教が聖書に精通しているので、私はこう言って尋ねました。「あなた様にお願いがあるのですが、私のお尋ねすることにお答えいただけるでしょうか」すると彼は答えました。「娘よ、何なりと言ってみなさい。知っていることならお答えしましょう」そこで私は言いました。「私は聖書を通して聖なるアブラハムが、父のテラ、妻のサライ、兄弟の息子ロトと共にこの地に来た^{注76}ことは知っています。しかしナホルとベトエルがいつこの地に来たのかは読んでいません。私が知っているのはただ、アブラハムのしもべが後にナホルの息子ベトエルの娘リベカを自分の主人の息子、つまりイサクの嫁に請うためにハランに来た^{注77}ということだけです」すると聖なる司教は私に言いました。「娘よ、その通りです。あなたの言う通り創世記には、聖なるアブラハムが一族と共にここに來たと書かれています。^{注78}しかしナホルとその一族、そしてベトエルがいつ來たのかは正典は語っていません。しかし明らかに彼らも後にこの地に来ていて、結局は町から約1マイルの所に彼らの墓があるわけです。なぜなら聖書は、聖なるアブラハムのしもべが聖なるリベカを迎えにここに来ている^{注79}こと、そして聖なるヤコブがシリア人ラバンの娘たちを迎えに再びこの地を訪れている^{注80}ことを確かに記しているからです」そこで私は、シリア人ラバンの娘ラケルが草をはませていた家畜に聖なるヤコブが水を飲ませた井戸^{注81}はどこにあるのか尋ねました。すると司教が私に言いました。「ここから6マイルの所で、当時シリア人ラバンの村であった所の近くにがあります。でもあなたがお望みなので私たちも一緒に行き、そこには多くの極めて聖なる修士や隠者たち、そして聖なる教会があることをあなたにお見せしましょう」私はさらに聖なる司教にテラが一族の者たちと始めに住んでいたカルデア人たちの地^{注82}は一体どこにあるのか尋ねました。するとその聖なる司教は私に言いました。「娘よ、お尋ねの場所はここから十番目の宿場のあるところで、ペルシャ

の内部にあります。というのはここからニシビスまで五つの宿場があり、そこからカルデア人の町であったウルまでもう五つの宿場があるからです。しかし今はそこにはローマ人は近づけません。その地全部をペルシャ人が占領しているからです。ローマとペルシャとカルデアの境界にあるこの地は特に東方と呼ばれてます」彼は他の多くのことも、他の聖なる司教や聖なる修道士たちもそうしてくれたように、話してくれました。しかしすべては聖書や聖者たち、つまり修道士たちの行ないについてや、すでに亡くなった人々がどんな驚くべきことをしたか、さらにまた今も生きている人々、つまり隠者たちが日常何をしているかについてでした。というのは私はあなた方に修道士たちの話が時には聖書や老いた修道士たちの行ない以外の話だったのではと思ってもらいたくないからなのです。

21 そこで二日間過ごした後で、その司教は聖なるヤコブが聖なるラケルの家畜に水をやった井戸に私たちを連れて行ってくれました。その井戸はハランから6マイルのところにあります。その井戸を記念して、傍らに極めて大きく、美しい聖なる教会が建っていました。私たちがその井戸に着くと、司教によって祈りが捧げられ、創世記のその箇所が読まれ、その場所にふさわしい詩編が一編朗読され、さらに祈りが再び捧げられ、司教が私たちを祝福しました。私たちはさらに井戸の脇にあまりにも大きな石が地面に横たわっているのを見ました。その石を聖なるヤコブが今もそこにある井戸から動かした^{注83}のです。ところで井戸の回りには、そこにある教会の司祭たちと、すぐ近くに庵を持っている修道士たち以外は誰も住んでませんでした。彼らの生活については聖なる司教が私たちに話してくれましたが、まったく前代未聞のものでした。それからその教会で祈りを捧げて、私は司教と共に聖なる修道士たちを、神と彼らに感謝しつつ、その庵に訪ねてまわりました。彼らは私がどの庵に入っても、喜んで迎えて

くれ、彼らの口から出るにふさわしい言葉を私にかけてくれました。彼らは私と私といっしょにいた人々に、庵に喜んで迎えた人々に与えることになっている習慣に従って、聖パンをくれました。この場所は大平原の中にあるので、井戸の正面約半マイルにある非常に大きな村を聖なる司教は私に示してくれました。私たちはその村を通して旅を続けました。ところでこの村は、司教の言うところによれば、かつてはシリア人ラバンの村であり、ファダナと呼ばれています。そこで私はヤコブの義父シリア人ラバンの墓を見せてもらいました。さらにラケルが父親から偶像を盗んだ^{注84}場所も見せてもらいました。このようにして神の名においてすべてを見て、私たちをその場所に案内してくれた聖なる司教と聖なる修道士たちに別れを告げて、私たちはアンティオキアから来た時と同じ道、同じ宿場を辿って帰りました。

22 私がアンティオキアに戻ると、引き続き一週間そこに留まりました。それは旅に必要な物を準備する期間でした。そしてこのようにしてアンティオキアを出発して、いくつかの宿場を辿って行くと、キリキアと呼ばれる地方に着きました。その首都はタルソスですが、私はエルサレムに行くときにすでにそこに立ち寄っています。しかしタルソスから三つ目の宿場、つまりヒサウリアに聖テクラの殉教記念堂があるので、そこに行くのがとても嬉しく思えました。特に記念堂はとても近くにあったので。

23 さてタルソスを出発して、私はまだキリキア地方内で海辺にあるポンペイオポリスと呼ばれるある町にやって来ました。そしてそこからもうヒサウリア領内に入り、コリコと呼ばれる町に逗留しました。そして三日目にヒサウリアのセレウキアと呼ばれる町に着きました。そこに着くと、私はもと修道士だった誠に聖なる司教のところに行きました。さらにその

町でとても美しい教会を見ました。そしてそこから聖テクラ記念堂までは、その場所は町の向こう側の丘の上、しかし平らな所にあるのですが、町から約一マイル半の距離なので、わたしは宿をとるために、心積もり通り、そこまで行くことにしました。さてその聖なる教会のあたりには男子や女子の無数の庵以外は何もありません。私はそこで大の仲良しに会いました。東方では皆が彼女の生活について証言をしていました。名前をマルタナと言い、聖なる女執事です。彼女が祈るためにエルサレムに上った折、私はそこで彼女と知り合いになっています。ところで彼女はアプタクティタたち^{注85}、つまり童貞たちの修道院を指揮していました。彼女が私に会ったときの彼女のそして私の喜びはいかばかりであったか、それを書き表わす事ができるでしょうか。しかし話を本題に戻すと、岡の上には多くの庵があり、その中程に巨大な壁があります。それが教会を囲んでおり、その中に殉教者記念堂があります。その記念堂はとても美しいものです。そこでヒサウリア人から教会を守るために壁が設けられました。というのは彼らは非常に悪く、しばしば掠奪をするので、そこにある修道院の回りで何か彼らがしかねないからです。私が神の名においてそこに着くと、殉教者記念堂で祈りが捧げられ、さらに聖テクラの全言行録が読まれ、私は我らの神キリストに限りない感謝を捧げました。分不相応で、取るに足らない私に神は全てにおいて望みを叶えてくださったのです。このようにしてそこに二日留まり、そこにいた聖なる修道士たちや男女のアプタクティタたちに会って、祈りを捧げ、聖体を拝領して道をタルソスに取って返しました。そこで三日逗留して、私は神の名においてそこから（再び）旅に出ました。このようにしてその日の内にタウルス山の麓にあるマンソクレナスと呼ばれる宿場に着いて、そこに泊まりました。そして翌日そこからタウルス山に登り、行きに通った地方、つまりカパドキア、ガラテヤ、ビティニアとすでに知っているルートを抜けてカルケドンに着きました。そこに

は私が昔からすでに知っている聖エウフェミアの極めて有名な殉教記念堂があるので、その地に宿をとりました。このようにして翌日私は海路コンスタンティノープルに到着し、我らの神キリストに感謝を捧げました。というのは分不相応でとるに足らない私に神はこのような恵みを、つまり行きたいという意志だけではなく、私が望んでいたところを旅行をして回り、再びコンスタンティノープルに帰って来るという能力を与えてくださったのですから。私はそこに着くと、その地に数多くある教会、使徒記念堂、殉教者記念堂の一つ一つで、私をこのように哀れんでくださった我らの神イエスに感謝を捧げ続けました。私の光である婦人たちよ、私がそこからこれをあなた方に書き送っているとき、すでに私は聖なるそして至福なる使徒ヨハネの殉教記念堂で祈るために、我らの神キリストの名において、アジア、つまりエフェソに行こうとしていたのです。もしその後も命長らえ、さらに他の地も知ることができたら、神の御加護があれば、直接にお会いしてあなたがたにお話ししましょう。あるいは、もし別のことをしようという気になったら手紙で必ずお知らせしましょう。私の光である婦人たちよ、あなた方だけは私が体の内にあると、すでに体の外にあると^{注86}（私が生きていようと、すでに死んでいようと）、私のことを憶えていてほしいと思います。

II

24 あなた方に聖なる場所では毎日どのような祭儀が執り行なわれているかを知ってもらうために、はっきりとお知らせすべきだと思いました。これらを知ることがあなた方にとって喜ばしい事だと知っておりますので。毎日鶏の鳴く前に、復活教会のすべての戸が開けられ、この地で修士、修道女と呼ばれているすべての人々が下りて来ます。彼らばかりでなく、この早朝の儀式に参列しようとする男女の俗人たちもです。それから

夜明けまで聖歌が歌われ、詩編が、そして交誦もまた同じように、呼応して唱えられるます。そして聖歌が歌われる度に祈りが唱えられます。毎日二人あるいは三人ずつの司祭が、そしてまた助祭たちも同様に、修道士たちと共に順番にやって来きます。そして修道士たちが、聖歌あるいは交誦の度に祈りを唱えます。さて夜が明け始めると、朝の聖歌が始まります。すると司祭を伴って司教が現われ、直ちに洞窟の中に入り、格子の中からはまずすべての人のために祈りを捧げます。さらに司教は記憶すべきであると思う人々の名前を読み上げ、それから求道者を祝福します。そして再び祈りを捧げ、信者たちを祝福します。この後司教が格子の中から出てくると、皆彼の手に（接吻するために）近付きます。すると彼はすでに立ち去りながら一人一人祝福します。このようにして解散するのはもう日が出てからです。第六時に再び皆が同じように復活教会に下りてきて、司教に知らせが行くまで詩編と公誦が唱えられます。司教はまた下りてくると、座らず、直ちに復活教会の格子の中に、つまり朝入った洞窟のなかに入り、そこからまた、まず祈りを捧げ、そして信者を祝福します。彼が格子の中から出てくると、また皆が彼の手に（接吻するために）近付きます。このようにして第9時にも、第6時と同じ事が行なわれます。さて第10時には、この地でリニコン^{注87}と呼ばれ、私たちの間では夜祷と言っているものがあります。同じようにすべての人が復活教会に集まり、すべての松明と蠟燭が燈され、非常な明るさとなります。ところで明かりは外からではなく洞窟の内部から、つまり格子の中から持参され、そこでは昼夜常に明かりが輝いており、夜祷の詩編だけでなく、交誦も長時間唱えられます。司教に知らせが行くと、下りてきて高いところに座り、司祭たちもまた自分たちの場所に腰を下ろします。（すると）詩編と交誦が唱えられます。そして習慣通りそれらがすべて唱えられると、司教が起立し格子の前、つまり洞窟の前に立ちます。そして助祭の一人が習慣に従って（死者）一

人一人の追悼を行ないます。助祭が一人一人の名前を言うと、必ず大勢の聖歌隊の少年が立ってキリエ・エレイソンと答えます。それは私たちの言う「主哀れみ給え」で、その声は大きく鳴り響きます。そして助祭が唱えるべきことをすべて唱えおわると、司教がまず祈りを捧げ、すべての人のために祈ります。それから信者も求道者も皆一緒に祈りを捧げます。再び助祭がそこにいる求道者に一人一人頭を下げるように声をかけます。そして司教が立って求道者に祝福を与えます。また祈りが捧げられ、再び助祭が声をあげて、そこにいる信者一人一人に頭を下げるように促します。また司教が信者を祝福し、こうして復活教会での解散となります。各々が司教の手に（接吻するために）近づこうとします。それから復活教会から十字架像まで聖歌と共に司教が導かれ、全会衆も続きます。そこに着くと司教はまず祈りを捧げ、また求道者を祝福します。再び別の祈りが捧げられ、また信者を祝福します。その後再び全会衆と同様司教も十字架像の後へ行き、そこで十字架像の前で行なわれた事と同じ事が再び行なわれます。そしてまた、復活教会や十字架像の前と同じように、十字架像の後ろでも人々が司教の手に（接吻するために）近づきます。ところで非常に多くの巨大なガラスのランプが至る所に吊してあります。そして非常に多くの燭台が十字架像の前や復活教会の前と同様に、十字架像の後にもあります。これらすべて（の儀式）は夕闇と共に終わります。この祭儀は（週）6日毎日このように十字架像の所と復活教会で行なわれます。7日目、つまり日曜日には鶏が鳴く前にその場に來れるすべての人が、まるで復活祭に復活教会のわきにある大聖堂に集まるように、しかし（この時は）屋外に、集まります。そこにはこのために明かりが下がっています。というのは、彼らは鶏が鳴くの間に合わないのではと思って、先にきてそこに座っているからです。そして（そこで）聖歌と交誦が捧げられ、聖歌や交誦ごとに祈りが唱えられます。司祭や助祭たちは集まる多くの人のために常にそこで

徹夜課の準備ができています。なぜなら習慣で聖なる場所は鶏が鳴く前には開かないからです。間もなく最初の鶏が鳴くと、ただちに司教が下りてきて、復活教会の洞窟の中に入ります。すべての入り口が開けられ、すべての人が復活教会に入ります。そこにはすでに無数の明かりが光っています。人々が入ると、司祭の誰か一人が詩編を唱え、皆が応えます。この後祈りが捧げられます。再び助祭の誰か一人が詩編を唱え、同じように祈りが捧げられます。三番目の詩編は誰か聖職者によって唱えられ、三番目の祈りが捧げられ、すべての（死者の）追悼が行なわれます。これら三編の詩編が唱えられ、三回祈りが捧げられると香炉が復活教会の洞窟に運び込まれ、復活教会の大聖堂全体が香に包まれます。すると司教が格子の内側で立って聖書を取り、入り口に近づき、司教自ら主の復活の箇所を読み上げます。朗読が始まると皆が非常な泣き声やうめき声をあげて涙に暮れるので、どんなに無感覚な者でも主が私たちのために甘受された多くの事を思い感涙にむせぶほどです。聖書を読み終えると、司教は退出して、聖歌と共に十字架像のところまで導かれ、皆が彼について行きます。そこで再び詩編が一篇唱えられ、祈りが捧げられます。司教はまた信者たちを祝福し、解散となります。司教が立ち去るとき、皆が手に（接吻するために）近づきます。間もなく司教は自分の家に引き上げます。その時間からすでにすべての修道士たちが復活教会に戻り、夜明けまで詩編と交誦が唱えられます。そして詩編や交誦の度ごとに祈りが捧げられます。というのは毎日交替で司祭や助祭たちが会衆と共に復活教会で徹夜祈祷をするからです。男女の信徒のうち望むものは夜明けまでそこに留まり、そうでないものは帰宅し、寝て休息します。

25 ところで夜が明けると日曜日なので、コンスタンティヌスが建てた大聖堂まで行列して行きます。その教会はゴルゴタの十字架像の後にあ

り、そこで日曜日には至る所で行なわれるようなすべての事が習慣に従って行なわれます。しかしそこでは居合わせたすべての司祭のなかで望む司祭はすべて説教をするのが習わしになっています。そして彼らすべてが終えた後、司教が説教をします。これらの説教は人々が常に聖書や神の愛について教えられることができるよう、日曜日に必ず行なわれます。これらが行なわれると、教会での解散がとても遅くなり、それ故第4時前か、あるいは恐らく第5時前にならないと解散になりません。しかし至る所で行なわれているように、習慣に従って教会で解散になると、修道士たちが聖歌を歌いながら司教を復活教会まで導きます。聖歌と共に司教が現れると、復活大聖堂のすべての扉が開かれ、すべての人が、少なくとも信者は中に入ります。しかし求道者は入りません。そして人々が入ると、次に司教が入り、直ちに洞窟の格子の中に行きます。初めに神に感謝が捧げられ、次いですべての人のために祈りが唱えられます。それから助祭がそこにいる全会衆に頭を下げるように声をかけます。すると司教が格子の内側に立って彼らを祝福し、それから退出します。司教が退出するときに、すべての人が彼の手に（接吻するために）近づきます。このようにして大体第5時か第6時まで解散が遅れます。また夜祷の時にも日々の習慣に従って同じように行なわれます。この習慣は祭日を除いて年間を通して毎日行なわれます。祭日にはどのように行なわれるかは後に述べることにします。ところですべてのうちで非常に特別なのは、彼らが詩編や交誦が夜唱えられるものと、反対に朝唱えられるものが常に適切なものであるようにしていること、さらに、行なわれることがすべて同じことに向かうように、昼間でも第6時、第9時あるいは夜祷で唱えられるものが適切で理に適ったものであるようにしているということです。そして1年中日曜日は必ず大聖堂、つまり十字架像の後のゴルゴタにあり、コンスタンティヌスが建てた大聖堂に人々に行くのですが、ただ一回の日曜日、つまり復活祭の後

50日目の聖霊降臨の祝日には後に示すようにシオンに行きます。まず大聖堂でミサが行なわれ、第3時になる前に着くようにシオンに行くのです。

1 ページ欠けている。

「主の名によって来られる方に、祝福があるように」^{注88} と他の章句が続きます。徒歩の修道士たちのためにゆっくり行く必要があるので、エルサレムに着くのは人とお互に見分けが付き始める時間、つまり夜明け間近かですが、まだ明るくなる前の時間になります。到着すると、司教は直ちに復活教会に入り、皆が続きます。そこではすでに明かりが煌々と輝いています。そこで詩編が一篇唱えられ、祈りが捧げられ、まず求道者が、それから信者が司教から祝福を受けます。司教が退出し、皆それぞれ休息するために自分の家に戻ります。しかし修道士たちは夜明けまでそこに留まり聖歌を歌います。休息が終わると、人々は第2時の初めに皆ゴルゴタにある大聖堂に集まります。その日の復活教会、十字架像、あるいはベトレヘムでの装飾がどんなものかは記すまでもないでしょう。そこには金と宝石と絹以外はありません。というのは壁布を見ても金糸入りの絹布、カーテンを見ても同じく金糸入りの絹布だからです。宝石を埋め込まれた金のあらゆる種類の聖具がその日使われます。ろうそくや燭台やランプや種々の聖具の数や重さは見積もったり書き表わしたりすることができるのでしょうか。実際建物の装飾についてはなんと言ったらいいのでしょうか。これはコンスタンティヌスが母のもとで、帝国のあらん限りの資力を注ぎ込んで、金やモザイクや貴重な大理石で飾ったもので、復活教会や十字架像やエルサレムの他の聖なる場所と同じくらい大聖堂も装飾が施されています。しかし話を元に戻すと、最初の日にゴルゴタにある大聖堂でミサが行なわれます。そして説教があり、一つ一つ読誦があり、聖歌が歌われますが、

それらは皆その日にふさわしいものです。それから間もなくその教会で解散になると、習慣に従って聖歌を歌いながら復活教会まで行きます。そして第6時ごろ解散となります。その日夜祷では日々の習慣通りに行なわれます。翌日再び同じようにゴルゴタの教会に行き、3日目もそうします。従って3日間このすべての壮麗な行事がコンスタンティヌスが建てた教会で第6時まで行なわれます。4日目はエレオナ、つまりオリーブ山にある教会で。それはとても美しい教会で、すべてが同様に飾られており、そこですべてが同じように執り行なわれます。5日目はエルサレムから約1マイル半の所にあるラザリウム^{注89}で、6日目はシオンで、7日目は復活教会で、8日目は十字架像のところで行なわれます。従ってこのように8日間このすべての壮麗な行事とこういった飾り付けが、私が前に挙げたすべての神聖な場所で行なわれるのです。ところでベトレヘムではこの8日の間毎日この飾り付けがあり、司祭やその地のすべての聖職者やその地に配属されている修道士たちによって同じ壮麗な行事が行なわれます。というのは皆が司教と夜エルサレムに帰る時間から、その地の修道士は誰であろうとベトレヘムの教会で聖歌や交誦を唱えながら夜が明けるまで眠らずにいるからです。司教はこの期間中エルサレムで過ごさなければなりません。この日の祭典や壮麗な行事^{注90}のために大勢の群集が、修道士だけでなく俗人男女が、至る所からエルサレムに集まります。

26 御公現の祝日^{注91}から40日目の日は実際この地で非常に盛大に祝われます。というのはその日は復活教会で行列があり、皆が行列に参加し、すべてが復活祭の時のような極めて盛大な行事でいつもの習慣に従って行なわれるからです。さらにすべての司祭が説教をし、司教もします。彼らは必ず、ヨセフとマリアが40日目に主を神殿に連れて行き、シメオンと、ファヌエルの娘で女預言者のアンナが彼を見たという聖書の箇所、主を見

て彼らが言った言葉、また両親がした捧げ物について^{注92}話します。そしてまもなくして恒例のすべての事が習慣どおりに祝われると、秘蹟^{注93}が行なわれ、解散となります。

27 復活祭が来ると、次のように祝われます。私たちの所では、復活祭の前の40日間（断食が）守られるのですが、ここでは復活祭の前の8週間に渡って守られます。日曜と土曜は断食をしないので、8週間守られるのです。一回土曜日例外があり、その日は復活祭の夜祷があるので断食しなければなりません。その日を除いてはここでは年間を通して土曜日には決して断食はしません。それで8週から8回の日曜日と、前述のように1回だけ断食をしなければならぬ土曜日があるので、7回の土曜日を差し引くと41日断食をする日が残ります。これはここではエオルタエ^{注94}、つまり四旬節、と呼ばれています。各週の各曜日には次のように行なわれます。日曜日には一番鶏が鳴く頃から、1年中日曜日にするように、司教が復活教会の中で福音書から主の復活の箇所を読みます。そして同じように、1年中日曜日に行なわれる事が夜明けまで復活教会と十字架像の所で行なわれます。やがて朝になると日曜日にいつも行なわれているように行列があり、ゴルゴタの十字架像の後にある殉教者記念堂と呼ばれる大聖堂で日曜日に習慣として行なわれる事が行なわれます。そして同じように教会から解散すると、日曜日にいつも行なわれているように、聖歌を歌いながら復活教会まで行きます。こうしているうちに第5時になります。夜祷も、ふだん復活教会や十字架像の所、そしてすべての聖なる場所におけるように、いつもの時間に行なわれます。日曜日には9時課は行なわれません。月曜日も同様、1年中行なわれているように、一番鶏が鳴く頃から復活教会に行き、いつも行なわれている事を朝まで行ないます。再び第3時に復活教会に行き、1年を通して通常第6時に行なわれることになってい

る事を行ないます。というのは四旬節中は第3時にも行くことが加えられるからです。第6時にも第9時にもまた夜祷の時にも、1年を通してこれらの聖なる場所でいつも行なわれる習慣通りに事が行なわれます。同様に火曜日もまた月曜日と同じ事がすべて行なわれます。水曜日にも同じように夜に復活教会へ行き、朝までいつもの事が行なわれます。第3時も第6時も同様です。ところで第9時にはいつもの習慣通り、つまり一年中そうなのですが、水曜日と金曜日にはシオンに行列して行きます。なぜならこの地では殉教者の祝日と重なる場合を除いて、必ず水曜日と金曜日には求道者も断食をし、そのために第9時にシオンに行列して行くのです。たまたま四旬節中に殉教者の祝日と水曜日・金曜日が重なる場合には、第9時にシオンに行列はしません。四旬節中は前述のように、年の習慣に従って水曜日には第9時にシオンに行列していきます。そしてミサを除いて第9時にする習慣になっていることがすべて行なわれます。というのは人々が常に律法を学ぶことができるように、司教や司祭がずうっと説教をするからです。解散の時間になると、人々が聖歌と共に司教をそこから復活教会まで導きます。このようにして到着し、復活教会に入ると、もう夜祷の時間です。聖歌や交誦が唱えられ、祈りが捧げられます。そして復活教会と十字架像の所で夜祷の解散となります。これらの日々、つまり四旬節中の夜祷の解散は必ず年間の通常よりも遅くなります。木曜日には月曜日や火曜日と同じようにすべてが行なわれます。金曜日には水曜日と同じようにすべてが行なわれます。そして第9時には同じようにシオンへ行きます。そしてそこから同じように聖歌とともに司教が復活教会まで導かれます。しかし金曜日には徹夜課は復活教会で人々が聖歌と共にシオンから到着する時間から朝まで、つまり夜祷の時間から翌日の朝になるまで、すなわち土曜日まで行なわれます。ミサは復活教会で、日が昇る前に解散できるように早朝に行なわれます。一晩中交互に詩編と応誦と交誦と種々の読誦が

行なわれます。これらすべては朝まで続けられます。復活教会で土曜日に行なわれるミサは、つまりミサ聖祭の事です、太陽が昇る時間には復活教会で解散できるように、日の出前に行なわれます。四旬節中は 毎週このように行なわれます。ところで前に述べた事です、土曜日は早朝、つまり日の出前に、ミサが行なわれますが、それはこの地で週番修道士と呼ばれる人々が早く（断食を）解くことができるようにするためです。というのは週番修道士と呼ばれる人々、つまり何週間も断食をする人々が、日曜日には第5時にミサがあり、（その後）食事をするのがこの地の四旬節中の断食の習慣だからです。彼らは日曜日に朝食をとると、もう土曜の朝、復活教会で聖体拝領した後にしか食事をしません。それ故彼らが早く（断食を）解くことができるように、土曜日には復活教会で日の出前にミサが行なわれるのです。今述べたように彼らのためにミサが朝行なわれるのですが、彼らだけが聖体拝領するのではなく、その日に復活教会で聖体拝領を望む者はすべて拝領します。

28 ある人々は日曜日のミサ後、つまり第5時か第6時に食事をすると、もう次の土曜日に復活教会でミサが終わるまで1週間ずっと食事をしないのがこの地の四旬節中の断食の習慣です。彼らは何週間もずっと断食を続けます。彼らは土曜日朝に食事をすると、もう晩には食事をしないで、次の日、つまり日曜日教会が終わった後、第5時かもっと遅く朝食をとり、その後はすでに述べてように、もう次の土曜日まで食事をとりません。ここでアプタクティタ（童貞）と呼ばれる人々は皆、男も女も四旬節中だけでなく一年中食事は、取る時には、日に一回というのがこの地の習慣です。ところでこのアプタクティタの中で、前述のように丸々何週間も断食できない人は、四旬節中ずっと中間の木曜日に夕食をとります。これもできない人は四旬節中ずっと二日断食をします。さらにこれもできない人は夕方

ごとに食事をとります。誰もこれだけしろと要求しません。各々ができるだけのことをするのです。十分にした人が誉められもしないし、あまりしなかった人が咎められたりもしません。これがこの地の習慣だからです。四旬節中の彼らの食事は次のようなものです。パンはまったく食べられないし、油も木になるものも味わえません。ただ水とわずかばかりの小麦粉の粥だけです。今述べたように四旬節の・・・がこのように行なわれます。

29 そしてこれら何週間もの・・・が終わると、復活教会での徹夜課が、人々が詩編を唱えながらシオンからやって来る金曜日の夜祷の時間から、復活教会でミサが挙げられる土曜日の朝まで行なわれます。このようにして四旬節の第1週目と同じように、2週目も3週目も4週目も5週目も6週目も同じように行なわれます。7週目が来ると、つまりその週も含めてもう復活祭まで2週間となると、毎日すべてが今までの週とまったく同じように行なわれるのですが、ただこれまで6週間復活教会で行なわれてきた徹夜課が7週目金曜日には、6週間復活教会で行なわれてきた様式通りにシオンで行なわれます。すべての徹夜課において必ずその日とその場所にふさわしい詩編や交誦が唱えられます。土曜日の朝明け方になると、司教が捧げ物をして土曜の朝のミサを挙げます。解散するときに、助祭長が声をあげて言います。「皆さん、本日第7時にラザリウムに行っていきましょう」そこで第7時になると、皆ラザリウムにやって来ます。ラザリウム、つまりベタニアは町から2マイルぐらいのところにあります。エルサレムからラザリウムに行く途中、そこ(ラザリウム)から半マイル程のところ、ラザロの妹マリアが主を出迎えた場所の道端に教会が建っています。そこに司教が着くと、すべての修道士が彼を出迎えます。そして人々がそこに入り、詩編が一編と交誦がひとつ唱えられ、ラザロの妹が主に会ったと書かれている福音書の箇所^{註95}が読まれます。このようにして祈りが捧げら

れ、すべての人々が祝福を受けると、詩編を唱えながらそこからラザリウムへ行きます。ラザリウムに着くと、全群衆が集まるので、その場所だけでなく、辺りの野原もすべて人でいっぱいになります。再びその日その場所にふさわしい詩編と交誦が唱えられ、同様にその日に合う読誦がすべてなされます。解散するときに、過ぎ越しの祭りの告示があります。つまり司祭が高いところに上って、「イエスが過越祭の六日前にベタニアに来られると云々」と福音書に書かれている箇所^{注96}を読みます。この箇所が読まれ、過ぎ越しの祭りが通告されると、解散となります。福音書に書かれているように、過ぎ越しの六日前にこのことがベタニアで起こったので、その日にこういう行事が行なわれるのです。実際土曜日から木曜日まで六日あり、木曜日に晩餐の後、夜に主が捕えられました。皆町に戻り、まっすぐ復活教会に赴いて、習慣に従って夜祷が行なわれます。

30 次の日、つまり日曜日、この地で大週と呼ぶ復活祭の週に入りますが、鶏が鳴く頃から習慣となっていることが復活教会と十字架像のところで朝まで祝われます。そして日曜日の朝は習慣に従って、殉教者記念堂と呼ばれる大聖堂まで行進して行きます。これはゴルゴタ、つまり主が苦しみを受けた十字架像の後にあるので殉教者記念堂と呼ばれています。そこからこの名があるのです。習慣に従って大聖堂ですべてのことが行なわれ、解散する前に、助祭長が声をあげてまず言います。「今週はずっと、つまり明日から、皆第9時に殉教者記念堂、つまり大聖堂に集まりましょう」それからまた声をあげて言います。「今日は皆第7時にエレオナに行っていきましょう」大聖堂、つまり殉教者記念堂で解散になると、司教は聖歌とともに復活教会まで導かれます。そしてそこで殉教者記念堂での解散の後、日曜日に復活教会で行なわれるのが習慣になっていることが行なわれると、各々が帰宅して急いで食事をすませます。第7時には皆がエ

レオナにある、つまりオリーブ山にある教会に行っているようにするためです。そこには主が教えを説いていた洞窟があります。

31 それで第7時にすべての人々が、そして司教もまたオリーブ山、つまりエレオナ^{註97}にある教会に登ります。その日その場所にふさわしい聖歌と交誦が唱えられ、読誦もまた同じように行なわれます。そして第9時近くになるとインボモン^{註98}、つまり主がそこから天に昇られた場所に聖歌を歌いながら登って行き、そこに座ります。というのはすべての人々は司教のいるところでは常に座るように命じられているからです。一方助祭だけはいつも立っています。そこでもその場所その日にふさわしい聖歌と交誦が唱えられます。また同じように読誦が間に入り、祈りが唱えられます。そして第11時近くになると、子供たちが「主の名によって来られる方に祝福があるように」と言いながら枝と棕櫚の葉で主を迎えたと書かれている福音書の箇所^{註99}が読まれます。そしてすぐに司教と全会衆が立ち上がり、それからオリーブ山の頂から全員徒歩で下ります。全会衆が聖歌や交誦を唱えながら司教の前を歩き、常に「主の名によって来られる方に祝福があるように」と応じます。その地の子供たちは皆、その中には小さくて歩けないので親の肩に乗っているような子もありますが、すべてがある者は棕櫚の枝を、また他の者はオリーブの枝を持っています。そしてこのようにして当時主が迎えられたと同じように司教が迎えられます。山頂から町へ、そしてそこから町中を通して復活教会へと全員ずっと徒歩で進んで、御婦人であろうと殿方であろうと、答唱を唱えながら人々が疲れないようにゆっくりゆっくり司教を導いていき、すでに夕刻になって復活教会に到着します。そこに着くと、遅くなっていますが夜祷がそれでも行なわれ、再び十字架像のところで祈りが捧げられ、人々が解散します。

3 2 次の日、つまり月曜日もまた一番鶏が鳴く頃から朝まで復活教会で行なわれるのが習慣になっていることが行なわれます。そして同じように第3時にも第6時にも四旬節中ずっと行なわれることが行なわれます。第9時にみんな大聖堂、つまり殉教者記念堂に集まり、そこで夜の第1時^{注100}までずっと聖歌と交誦が唱えられます。さらにその日その場所にふさわしい読誦が行なわれ、常に祈りが間に入れられます。夜祷も時間になるとそこで行なわれます。それ故殉教者記念堂で解散になるのは夜になります。そこで解散になると、そこから司教が聖歌と共に復活教会まで導かれます。復活教会に司教が入ると、聖歌が一曲歌われ、祈りが捧げられて、求道者として信者も祝福を受け解散となります。

3 3 火曜日でもまた月曜日と同じようにすべてが執り行われます。火曜日には次のことだけが付け加えられます。つまり夜遅く殉教者記念堂で解散になると、復活教会へ行き、そこでまた解散になると、みんな夜のその時間にエレオナ山にある教会に行きます。その教会に着くと、司教がそこでよく主が弟子たちを教えていた洞窟に入ります。そして福音書を受け取ると、立ったままで司教自身がマタイによる福音に書かれている主の言葉、つまり「人に惑わされないように気をつけなさい」と書かれているところ^{注101}を読みます。そしてその言葉の箇所をすべて司教が読みます。それを読み終わると、祈りが捧げられ、求道者として信者も祝福を受け解散となります。そして各々が夜もだいぶ遅くなって山から家に戻ります。

3 4 水曜日でもまた一番鶏が鳴く頃から一日中、月曜日と火曜日と同じくすべてが執り行われます。しかし夜に殉教者記念堂で解散して、司教が聖歌とともに復活教会に導かれると、彼は直ちに復活教会にある洞窟に入り、格子の中に立ちます。格子の前には司祭が立って福音書を受け取り、イス

カリオテのユダがユダヤ人達のところへ行って、主を渡すためにもらう金額を取り決めた箇所^{注102}を読みます。その箇所が読まれると、全会衆の泣き声やうめき声は非常なもので、その時涙を流して心を動かされない者は誰もいないほどです。それから祈りが捧げられ、求道者その後信者が祝福を受け解散となります。

35 木曜日にもまた朝まで復活教会で行なわれることになっていることが、一番鶏が鳴くころから執り行なわれ、第3時と第6時にも同じように行なわれます。第8時には習慣に従って、すべての人々が殉教者記念堂に集まります。しかし早く解散しなければならないので、他の日より早く(集まります)。このようにしてすべての人々が集まると、行なわれるべきことが行なわれます。その日は殉教者記念堂でミサが挙げられ、第10時頃にその場で解散となります。しかし解散になる前に、助祭長が声を上げて次のように言います。「夜の第1時にみんなエレオナにある教会に集まりましょう。というのは今夜私たちはとても大変なことをしなければならないのですから」 殉教者記念堂での解散の後、十字架像の後へ来て、そこで聖歌が一曲だけ歌われ、祈りが捧げられます。そしてそこで司教がミサを挙げ、すべての人が聖体拝領をします。実際その日一日を除いては一年を通して十字架像の後でミサが上げられることは決してありません。その日だけです。このようにしてそこでも解散になると、復活教会へ行き、祈りが捧げられ、習慣に従って求道者そして信者が祝福を受け、解散となります。それから各々が食事を取るために急いで家に帰ります。というのは食事の後すぐに、みんなエレオナの教会に行くからです。そこにはこの日、主が弟子たちと共に留まった洞窟があります。そこで夜の第5時頃までずっとその日その場所にふさわしい聖歌や交誦が唱えられます。同様に読誦も行なわれ、間に祈りが捧げられます。さらに主がこの日この教会に

ある洞窟の中で座って弟子たちと話したと記されている福音書の箇所^{注103}が読まれます。そしてそこからすでに夜の第6時頃になって主が天に昇った場所であるインボモンへ聖歌を歌いながら登っていきます。そしてそこで再び同じようにその日にふさわしい読誦、聖歌、交誦が唱えられます。さらにあらゆる祈りが捧げられますが、それらは司教が唱え、必ずその日その場所にふさわしいものです。

36 このようにして一番鶏が鳴く頃になると、聖歌を歌いながらインボモンを下りて、福音書に「そして石を投げて届くほどの所に離れ、祈られた云々」^{注104}とある、主が祈りを捧げた場所に行きます。この場所には綺麗な教会が建っています。そこに司教がすべての人と共に入り、その場所その日にふさわしい祈りが捧げられます。さらにふさわしい聖歌が一曲歌われ、主が弟子たちに、「誘惑に陥らぬように目を覚ましていなさい」と言われた福音書の箇所^{注105}が読まれます。そしてそこでその箇所全部が読まれ、再び祈りが捧げられます。そしてそこから聖歌を歌いながら、一番小さい子供までもが司教と共に徒歩でゲッセマニに下りていきます。徹夜課で疲れ、日々の断食で憔悴したこんなに大勢の人々がこのように高い山を下りなければならないので、聖歌を歌いながらゆっくりゆっくりゲッセマニにやって来ます。200本以上の教会のロウソクが明かりとしてすべての人々に用意されています。ゲッセマニに着くと、まずふさわしい祈りが唱えられ、聖歌が歌われ、そしてまた福音書の主が捕らえられた箇所が読まれます。その箇所が読まれると、全会衆の涙ながらの嘆き声やうめき声は大変なもので、恐らく遠く町までその声は聞こえることでしょう。そしてそれから町まで徒歩で聖歌を歌いながら行き、人の顔が判り始めるぐらいの時間に町の門に着きます。それから町の中に老人から子供まで、金持ちから貧者まで、一人残らず留まり、特にその日は誰も徹夜課から朝ま

で引き上げません。このようにして司教はゲッセマニから町の門まで、そしてそこから町中を通して十字架像の所まで導かれます。十字架像の前まで来るときには、すでにほとんど明るくなりかけています。そこで再び福音書の主がピラトの元へ連行される箇所^{註106}が読まれ、ピラトが主やユダヤ人達に言ったと書かれていることがすべて読み上げられます。それから司教は会衆に語りかけ、彼らを励まして、というのは彼らは一晩中苦行をして、その日は更に苦行をしなければならないので、倦むことのないよう、そして神に希望をつなぐように言います。神はその苦行故に、彼らにより大きなものを報いてくださるのですから。このように彼らをできるだけ励まし、次のように言葉をかけます。「今はしばらく各々自分の家に帰って、少し休みなさい。そして昼の第2時頃^{註107}に皆ここに戻っていてください。その時刻から第6まで十字架の聖なる木片が見られます。そしてそのことは救いに有用であると私たちはめいめい信じています」 実際私たちは皆第6時から再びこの場所、つまり十字架像の前に、読誦と祈りに夜まで専念するために集まらなければならないのです。

37 このあと、つまり日の出前に十字架像の所から解散になると、直ちに皆勇んで主が鞭打たれた柱の所で祈るためにシオンへ行きます。そこから戻り自分の家で少し休むと、すぐに皆準備ができます。このような中でゴルゴタに現在建っている十字架像の後に司教の椅子が据えられます。司教がその椅子に座り、その前に亜麻布で覆われたテーブルが置かれ、回りに助祭たちが立ちます。すると中に十字架の聖なる木片が入った銀メッキをほどこした小箱が運ばれて来ます。ふたが開けられ、銘とともに十字架の木片が取り出されてテーブルの上に置かれます。テーブルの上に置かれると、司教は座ったまま、手で聖なる木片の端を持ち、回りに立っている助祭たちが見守ります。このように見守られるのは習慣によるもので、求

道者も信者も全会衆が一人一人来て、テーブルのところで頭を下げ、聖なる木片に接吻して立ち去ります。いつのことかは知りませんが、ある人が噛って聖なる木片の一部を持ち去ったことがあると言われているので、また誰かがやって来て同じ事をしないように、今では回りに立っている助祭たちによって守られているのです。そこで全会衆が一人一人進み出て、皆一礼してまず額で、それから目で十字架と銘に触れ、十字架に接吻して立ち去りますが、誰も触れるために手を差し出す者はいません。人々が十字架に接吻して立ち去ると、助祭がソロモンの指輪と王たちが聖油を注がれた角型の容器をもって立ちます。人々が角型の容器に接吻し、指輪を崇め・・・・全会衆が一方の入口から入り、他方から出て、第6時まで動きがあります。というのはこれは前日、つまり木曜日にミサが挙げられた場所で行なわれるからです。しかし第6時になると雨が降ろうが熱かろうが、十字架像の前に行きます。そこは屋根のない所で、十字架像と復活教会の間にあり、非常に大きくとても美しい広間のような場所だからです。そこに全会衆が集まり、扉が開かないほどです。司教のために十字架像の前に椅子が用意され、第6時から第9時まで、次のような読誦以外の事は何も行なわれません。つまり、まず詩編から受難に関して述べている箇所はどれでも読まれ、そして使徒たち（の著作）から、書簡であれ、使徒言行録であれ主の受難について述べている箇所はまたどれでも読まれ、さらに福音書からも受難の箇所が読まれます。同じように、預言者たち（の書）からも主が苦しみを受けるであろうと述べているところが読まれ、同様にして福音書からも受難につて述べているところが読まれます。このようにして第6時から第9時までずっと読誦が行なわれ、聖歌が歌われます。これは預言者たちが主の受難について起こるであろうと言ったことがすべて、使徒たちの著作や福音書によってそれが実際に起こったことが示されているということをすべての人に知らせるためです。このようにしてその

3時間の間全会衆は、預言されなかった事で起こった事は何も無いこと、完全に成就されなかった事で預言された事はなにもないことが教えられます。ところで（この間）常にこの日にふさわしい祈りが間に入れられます。読誦や祈りの度に、全会衆の昂ぶりと嘆きは驚く程です。というのは、老いも若きもその日その3時間の間、主が我々のためにあの様に苦しみを受けた事を信じがたいほどに嘆かない者はいないからです。この後、第9時近くになると、ヨハネによる福音書から主が息を引き取った場面^{注108}が朗読されます。これが読まれると、祈りが捧げられ解散となります。しかし十字架像の前から解散になると、直ちに皆大聖堂、つまり殉教者記念堂へ・・・その週皆が殉教者記念堂に集まる第9時から遅くまで行なわれことが習わしになっていることが行なわれます。殉教者記念堂から解散になると、復活教会にやって来ます。そしてそこに来ると、福音書からヨセフがピラトに主の亡骸を要求し、それを新しい墓に入れる箇所^{注109}が読まれます。これが読まれると、祈りが捧げられ、求道者たちが祝福を受けて解散となります。その日は人々が疲れていることを知っているのも、復活教会で徹夜課をするように声がかかりませんが、そこで徹夜課をするのが習わしになっています。そこで人々の中で望む者、あるいはむしろできる者が徹夜課を行ない、できない者はそこで朝まで徹夜課はしません。司祭たちはそこで徹夜課をします。つまり丈夫なあるいは若い司祭が行なうのです。そこでは一晩中聖歌と交誦が朝まで捧げられます。非常に多くの人々が、ある者は晩から、他の者は真夜中から、体力に応じて徹夜課を行ないます。

38 翌日土曜日には第3時、さらに第6時に習慣に従って（儀式が）行なわれますが、土曜日は第9時にはもう行なわれません。しかし大聖堂、つまり殉教者記念堂で復活祭の徹夜課が準備されます。復活祭の徹夜課は

我々のところと同じように行なわれます。ここでは次のことだけがより長く行なわれます。つまり新受洗者たちは、洗礼を受け泉から出てきたままの出立ちで司教と共にまず復活教会に導かれます。司教が復活教会の格子の中に入り、聖歌が一曲歌われ、司教が彼らのために祈りを捧げ、こうして彼らと共に大聖堂にやって来きます。そこでは全会衆が習慣に従って徹夜課をしています。そこでは我々の間でも習慣になっていることが行なわれ、ミサが挙げられ解散となります。そして大聖堂での徹夜課の解散の後、直ちに聖歌を歌いながら復活教会にやって来て、そこで再び福音書の復活の箇所が読まれ、祈りが捧げられ、再びそこで司教がミサを挙げます。しかし会衆のためにあまり長引かないようにすべて手早く執り行われ、人々はすぐに解散します。その日の徹夜課の解散は我々のところと同じ時刻です。

39 復活祭の日々は私たちのところと同じように晩に祝われ、祭儀は復活祭の8日間慣行通り、そしてどこでもそうであるように8日目まで行なわれます。ここでは復活祭の8日間は公現の祝日と同じ装飾と配列が復活教会でも、大聖堂でも、あるいは十字架像やエレオナにおいても、そしてベトレヘムまたラザリウムやあらゆる所で復活祭の間行われます。最初の日曜日に大聖堂、つまり殉教者記念堂に行列が行なわれ、月曜日も火曜日と同じように行なわれます。しかしこの時には必ず殉教者記念堂で解散になると、聖歌を歌いながら復活教会まで来ます。水曜日にはエレオナへ、木曜日には復活教会へ、金曜日にはシオンへ、土曜日には十字架像の前へ、さらに日曜日、つまり8日目には再び大聖堂、つまり殉教者記念堂へ行列が行なわれます。その復活祭の8日間毎日昼食の後、司教がすべての司祭、すべての新受洗者、つまり洗礼を受けたばかりの者、男女のすべてのアプタクティタ、さらに平信徒の中から望むすべての者と共にエレオナに登ります。聖歌が歌われ、イエスが弟子たちを教えていた洞窟のあるエレオナ

の教会と、さらにインボモン、つまり主が昇天した場所で祈りが捧げられます。そして詩編が読まれ、祈りが唱えられると、そこから夜祷の時間に復活教会まで聖歌を歌いながら下りていきます。これが8日間ずっと行なわれます。しかし復活祭の日曜日には夜祷の解散の後、つまり復活教会から解散の後、全会衆が司教を聖歌を歌いながらシオンに導きます。そこに着くとその日その場所にふさわしい聖歌が歌われ、祈りが捧げられます。そしてその日、主がその場所、つまり現在シオンの教会が建っている所で、戸が閉まっているのに弟子たちのところに入ってきて、その時には彼らのうちの一人、つまりトマスがいなかったのですが、彼が戻ってきて、主を見たという他の弟子たちに、「見ないうちは信じない」と言った福音書の箇所^{注110}が読まれます。この箇所が読まれ、再び祈りが捧げられ、求道者として信者も祝福を受けると、各々遅くに、大体夜の第2時頃、家路に就きます。

40 同じように復活祭から8日目、つまり日曜日には、第6時になるとすぐに全会衆が司教と共にエレオナに登ります。まずそこにある教会にしばらく留まります。聖歌とその日その場所にふさわしい交誦が唱えられ、同様にその日その場所にふさわしい祈りが捧げられます。そこから再び聖歌を歌いながらインボモンに登り、そこでもまたエレオナと同じ事が行なわれます。そして時間になると、全会衆とすべてのアプタクティタが聖歌を歌いながら司教を復活教会まで導きます。復活教会にはいつも夜祷が行なわれる時間に着きます。それで十字架像のところと同じように復活教会でも夜祷が行なわれ、そこから全会衆が一人残らず聖歌を歌いながら司教をシオンまで導きます。そこに着くと、同じようにその場所その日にふさわしい聖歌が歌われ、復活から8日目に主が弟子たちのいる所に入っていく、不信心の故にトマスを咎める福音書の箇所^{注111}が再び読まれます。そ

の時にその箇所がすべて読まれ、それから祈りが捧げられます。信者と同様求道者も習慣に従って祝福を受けると、各々復活の主日と同じように夜の第2時に家路に就きます。

4 1 復活祭から50日目まで、つまりペンテコステ^{注112}までここではまったく誰も、アプタクティタさえも、断食はしません。というのはこの時期はいつも、年間を通してと同じように復活教会において一番鶏が鳴く頃から朝まで通常の祭儀が行なわれ、第6時と夜祷の時も同様だからです。日曜日にはいつも習慣に従って殉教者記念堂、つまり大聖堂に行き、そこから聖歌を歌いながら復活教会へ行きます。この時期はまったく誰も断食をしないので、水曜日と金曜日はシオンへ行きますが、朝にです。ミサは慣行通り行なわれます。

4 2 復活祭から40日目、つまり木曜日、すべての人々は前日、つまり水曜日に、第6時過ぎに、徹夜課をするためにベトレヘムに行きます。徹夜課は主が生まれた洞窟のあるベトレヘムの教会で行なわれます。翌日、つまり復活祭から40日目の木曜日にミサが慣行通り行なわれ、司祭たちや司教はその日その場所にふさわしい説教をします。その後、遅くに各々エルサレムに帰ります。

4 3 復活祭から50日目、つまり日曜日は、会衆にとって一番大変な日ですが、すべての事が習慣に従って一番鶏の鳴く頃から行なわれます。復活教会で徹夜課が行なわれ、司教が日曜日には必ず読まれる福音書の箇所、つまり主の復活のところ^{注113}を読み、それから年間を通してと同じように、復活教会で習慣となっていることが執り行なわれます。朝になると全会衆は大聖堂、つまり殉教者記念堂へ行き、そして再び行なわれるのが習慣に

なっている事がすべて行なわれます。まず司祭たちが、それから司教が説教をし、規則になっていることがすべて行なわれます。つまり日曜日に行なわれる習慣に従って祭儀が執り行なわれるのです。しかしその日は殉教者記念堂で解散になるのは第3時前に早められます。というのは殉教者記念堂で解散になると、全会衆が一人残らず聖歌を歌いながら司教をシオンに導くからです。ただしちょうど第3時にシオンに着くように。そこに着くと、すべての言語が聞いてわかるように聖霊が降ったと記されている使徒言行録の箇所^{注114}が読まれます。それから慣行通りミサが挙げられます。今度は司祭たちは読まれた箇所について話をします。というのはシオンにあるこの場所は今は別の教会が建っていますが、かつて主の受難の後、弟子たちと共に多くの人々が集まった所で、ここで上述のようなことが起こったからです。この場所で使徒言行録から朗読が行なわれるのです。^{注115}その後慣行どおりミサが挙げられ、そこで奉献が行なわれます。そして解散の時に助祭長が声をあげて言います。「今日は第6時になったらすぐに皆エレオナ、つまりインボモンに行っていきましょう」すると全会衆は各々休息のために自分の家に帰ります。そして昼食後直ちに各々できる限りオリブ山、つまりエレオナに登り、一人のキリスト教徒も行かないで町に残ることのないようにします。オリブ山、つまり、エレオナに着くとまずインボモン、つまり主がそこから天に昇った場所に行きます。そしてそこに司教と司祭たちが座り、それから全会衆が座ります。そこで読誦が行われ、聖歌が間に入り、その日その場所にふさわしい公誦が唱えられます。そして挿入される祈りも必ずその日その場所にふさわしいものです。さらに主の昇天について書かれている福音書の箇所^{注116}が読まれ、再び主が復活の後、天に昇ったことが記されている使徒言行録の箇所^{注117}が読まれます。これが行なわれると、求道者として信者も祝福を受け、すでに第9時になってそこから降ります。そして聖歌を歌いながらこれもまたエレオ

ナにある教会、つまりその洞窟で主が腰を下ろして弟子たちを教えた教会へ行きます。そこに到着するとすでに第10時過ぎになります。そこで夜祷が行なわれ、祈りが捧げられ、求道者とそして信者も祝福を受けます。そして間もなくそこから聖歌を歌いながら降ります。その際すべての人が一人残らず皆司教と共にその日にふさわしい聖歌や交誦を唱えます。このようにしてゆっくりゆっくり殉教者記念堂までやって来ます。町の門まで来るとすでに夜になり、200本もの教会用のろうそくが会衆のために用意されます。ところで門から大聖堂、つまり殉教者記念堂まではかなりあるので、そこに到着するのはさらに夜の第2時頃になります。なぜなら会衆のために足が疲れないように全行程をゆっくりゆっくり進むからです。第五地区^{注118}の大扉が開くと全会衆が聖歌を歌いながら、司教と共に殉教者記念堂に入ります。そこに入ると聖歌が歌われ、祈りが捧げられ、求道者とそして信者も祝福を受けます。そしてそこから再び聖歌を歌いながら復活教会へ行きます。同じように復活教会に着くと、聖歌と交誦が唱えられ、祈りが捧げられ、求道者とそして信者も祝福を受けます。十字架像のところでも同じように行なわれます。そして再びそこからキリスト教徒の全会衆が一人残らず聖歌を歌いながら司教をシオンまで導いて行きます。そこに着くとふさわしい読誦が行なわれ、詩編と交誦が唱えられ、祈りが捧げられ、求道者とそして信者も祝福を受け解散となります。解散になると皆司教の手に（接吻をしようとして）近づきます。そしてこのようにして、真夜中頃に各自家路に就きます。従ってこのようにその日は大変骨の折れる日となります。というのは一番鶏が鳴く頃から復活教会で徹夜課をし、それから一日中決して休まないからです。そしてこのように執り行なわれることはすべて長くかかるので、シオンでの解散の後、真夜中に皆が家路に就くことになります。

44 ところでペンテコステの翌日から、すでに皆が自分の能力に従って年間を通しての習慣通り断食をしますが、土曜日と日曜日は例外です。この両日はこの地では決して断食はしません。同様にその後の日々はひとつひとつの事が年間を通してと同じように行なわれます。つまり必ず一番鶏が鳴く頃から復活教会で徹夜課が行われます。日曜日ならば習慣に従ってまず司教が一番鶏が鳴く頃から復活教会の中で福音書の主の復活の場面を読みます。これは日曜日には必ず読まれるものです。それから夜明けまで聖歌や交誦が復活教会で唱えられます。日曜でない日なら同じように一番鶏が鳴く頃から夜明けまで聖歌と交誦だけが復活教会で唱えられます。アプタクティタはすべてそこに行きます。平信徒は行ける者が行きます。司祭は交替で毎日行きます。彼らは一番鶏の鳴く頃から、司教は朝解散できるように日曜日を除いてすべての司祭たちと共に必ず夜明けに行きます。というのは司教は（日曜日は）復活教会で福音書を朗読するために一番鶏の鳴く頃から行かなければならないからです。再び第六時に習慣となっていることが復活教会で行なわれます。第九時にも同様です。そしてまた夜祷の時には同じように習慣に従い、年間を通して行なわれることになっている事が行なわれます。水曜日と金曜日はいつもシオンで習慣に従って九時課が行なわれます。

45 さらに私は復活祭に洗礼を受ける人々がどのように教育を受けるのか書いておくべきだったでしょう。名前を登録する人は四旬節の前日に登録し、司祭がすべての人の名前を書き留めます。即ちこの地でその期間に四旬節が執り行なわれると私が言ったあの八週間の前にということです。司祭が翌日、つまり四旬節のあの八週間が始まる日にすべての名前を書き留めると、大聖堂、つまり殉教者記念堂の真ん中に司教の椅子が用意されます。司祭たちはこちら側とあちら側で椅子に座り、聖職者は皆立っています。

ます。このような中で受洗者が一人一人導き入れられます。男ならば代父に、女なら代母に付き添われて入ってきます。このようにして導き入れられた受洗者の隣人たちに一人一人司教が次のように尋ねます。「この人は立派な生き方をしていますか」「両親を敬っていますか」「酔っていたり、偽りではないでしょうね」そして人間にとって重大な悪徳について一つ一つ尋ねます。しかし証人のいる前で質問を受けたこれらすべての人々によって、非難すべきところがないと判ると、司教は自らの手でその人の名前を書き留めます。しかし何か非難されるべき点があると、司教はその人に外に出るように命じ、「改めなさい」と言います。そして改めると、それから洗礼を受けます。このようにして男性（洗礼志願者）について、そして女性（洗礼志願者）について調べがあります。もし外国人でその人を知っている証人がいない場合には、洗礼を受けるのはそう簡単にはいきません。

46 ところで姉妹たちよ、こういった事が理由もなしに行なわれていると考えてはほしくないの、次のように書いておくべきでしょう。ここでは断食が行なわれる四旬節中に洗礼を受ける者は、復活教会で朝の解散となると、まず司祭から悪魔祓いを早朝に受けるのが習慣です。すると直ちに大聖堂の殉教者記念堂に司教のために椅子が用意され、男女の受洗者が皆司教の周りに輪になって腰掛けます。さらにその場には代父も代母もいます。そしてまた民衆の中から参列したい者はすべて入って腰を掛けますが、そうするのは信者だけです。求道者は司教が次のように彼らに戒律を教えている間はそこには入りません。つまり創世記から始めて、その40日の間すべての書を概説します。まず表面的意味を説明し、それから精神的な意味を明かしていきます。さらに復活について、また同様に信仰についてもその期間中にすべてが教えられます。これが公教要理と呼ばれるもので

す。教えられる期間が5週を過ぎると、彼らは使徒信經を授けられます。その哲理をすべての（聖書の）書の哲理と同じように彼らに一語一語まず表面的意味を、それから精神的な意味を説明します。使徒信經はこのようにして説明します。だからこの地では聖書が教会で読まれると、信者は皆ついていくことができるのです。というのもその40日の間、公教要理は3時間行なわれるので、第1時から第3時まで、皆教えを受けるからです。ところで姉妹たちよ、公教要理で司教の説明を聴くのに入ってくる信者たちの（感嘆の）声のほうが、司教が教会で腰掛けてこのような説明を一つ一つ述べるときの声より大きいということを神は知っておられます。公教要理がすでに第3時になって終わると、司教は直ちにそこから聖歌と共に復活教会に導かれ、第3時のミサがあります。このようにして7週間、日に3時間教えられます。というのは四旬節の第8週目、つまり大週間と呼ばれている週には、前述のことを果たすためにもう彼らを教えるために呼ばないからです。すでに7週間が過ぎ、あとこの地で大週間と呼ばれている復活祭のあの1週間だけになると、いよいよ司教が朝に大聖堂の殉教者記念堂にやって来ます。祭壇の後の後陣の奥まった所に、司教のために椅子が据えられ、そこに一人一人、男は代父、女は代母と共に進み出て、司教の前で使徒信經を唱えます。使徒信經を司教の前で唱え終わると、司教が皆に話しかけて次のように言います。「この7週間、あなたがたは聖書のすべての立法を教え込まれ、さらに信仰についても聴きました。さらに肉体の復活について、そして使徒信經のすべての哲理についても聴きました。あなたがたが今まで求道者であったにもかかわらず聴くことができたのです。しかしさらに深い神秘に関する言葉、つまり洗礼そのものに関する言葉は、あなたたちが今はまだ求道者なので聴くことができません。そして何かが理由もなしに行なわれるとあなたたちが考えないように、神の名において洗礼を受けたら、復活祭の後8日間教会の解散の後、復活教会

で（そのことについて）聴くことになるでしょう。というのは、今はまだ求道者なので、神のより秘められた神秘はあなたたちに語られないからです」

47 復活祭の日々が来ると、その8日間、つまり復活の主日から8日後まで、教会で解散になり、聖歌を歌いながら復活教会に行くと、まもなく祈りが捧げられ、信者が祝福を受けます。そして司教は復活教会の洞窟の中にある格子の内側に寄り掛かって立ち、洗礼式で行なわれることをすべて説明します。この時は求道者は誰も復活教会に近づきません。神秘について聴くことを欲する新受洗者と信者だけが復活教会に入ります。求道者が一人も入らないように入りが閉められます。司教が一つ一つ話して聴かせると、非常な称賛の声があがるので遠く教会の外までその声が聞こえるほどです。というのはまさしくすべての神秘を説き明かしていくので、説明されるのを聴いて感動しない者はいないからです。そしてこの地方では民衆の一部はギリシャ語とシリア語を解し、他の一部はギリシャ語だけを、さらに他の一部はシリア語だけを解するので、そして司教もシリア語を解しますが、つねにギリシャ語で話し、決してシリア語では話さないの、司祭が常にそばにいて、司教がギリシャ語で話すと、皆が説明が解るようにシリア語に通訳します。さらに教会で行なわれる読誦はどんなものでも、ギリシャ語で行なわれなければならないので、民衆がいつも理解できるように必ずシリア語に通訳する者がいます。もちろんそこにいるラテン語を話すどんな人も、つまりシリア語もギリシャ語も解らない人々も困らないように、彼らにも説明がなされます。というのは他にギリシャ語とラテン語の解る修道士や修道女がいて、彼らにラテン語で説明するからです。しかしここで何にもまして極めて嬉々として、また非常に見事に行なわれるのは、交誦や読誦、さらにはまた司教が唱える祈りと同じように聖

歌も、必ず祝われる日と行なわれる場所に常に適合し、ふさわしい意義をもつようにするという事です。

48 ゴルゴタにあり殉教者記念堂と呼ばれている聖なる教会が神に捧げられた日は献堂記念日と呼ばれています。復活教会のあるところ、つまり主が受難の後復活した場所にある聖なる教会もその日に神に捧げられました。これらの聖なる教会の献堂記念日は極めて盛大に祝われます。というのはその日に主の十字架が発見されているからです。そしてこのために上記の聖なる教会が最初に（神に）捧げられた日が主の十字架が発見された日となるよう定められたのです。盛大に同時に同じ日に祝われるためです。そして聖書にはその献堂式の日に聖なるソロモンも、彼の建てた神の家が完成して、神の祭壇の前に立って祈ったとあります。歴代誌にある如く^{注119}です。

49 この献堂式の日がやって来ると、8日間祝われます。何日も前から、色々な地方から、つまりメソポタミア、シリア、エジプト、つまり極めて多くの修道士たちがいるテーバイダからだけでなく、他のあらゆる場所や地方から修道士たちのみならずアプタクティタの群れが集まり始めます。なぜならこのような盛大な儀式にそしてこのような誉れある日にエルサレムに行かない人はいないからです。俗人は男も女も信仰心からその聖なる日のために、やはりあらゆる地方からこの時期にエルサレムに集まります。司教たちは少ないときでも、この期間エルサレムには40人か50人以上います。そして彼らと共に多くの司祭が来ています。要するに、善意を妨げるような不都合な必要性もないのに、この期間このような盛大な祭典に連ならなかった人は極めて重大な罪を犯した気持ちになるのです。この献堂式の時期、すべての教会の飾り付けは復活祭や公現節と同じです。そし

て復活祭や公現節の時のように毎日色々な聖なる場所に行列して行きます。というのは、最初の日と二日目は殉教者記念堂と呼ばれる大聖堂へ行くからです。また三日目はエレオナに、つまり主が受難の後、そこから天に昇った山にある教会に行きます。オリーブ山にあるその教会の中には、主が弟子たちを教えていた洞窟があります。四日目には・・・・・・・・・・

注 (旧) は旧訳聖書、(新) は新訳聖書を意味する。

- 注 1 (旧) 民数記 11 章 34 節
- 注 2 (旧) 出エジプト記 24 章 18 節
- 注 3 (旧) 出エジプト記 32 章
- 注 4 (旧) 出エジプト記 3 章
- 注 5 (旧) 出エジプト記 19 章 18～20 節、24 章 16 節
- 注 6 シナイ半島の端にある山塊のどの部分をシナイ山と呼ぶかは諸説がある。ここではその山塊の中で一番高い峰をシナイ山としている。
- 注 7 当時は日の出が第 1 時、日の入りが第 12 時であった。第 4 時は大抵現在の午前 10 時頃。夜も 12 時間に分けられていた。従って昼夜とも 1 時間の長さは季節によって違っていた。
- 注 8 (旧) 出エジプト記 19 章 18 節
- 注 9 (旧) 出エジプト記 32 章 19 節
- 注 10 (旧) 出エジプト記 34 章
- 注 11 ナイル河口の地中海の一部
- 注 12 (旧) 出エジプト記 17 章 6 節
- 注 13 (旧) 列王紀上 19 章 9 節
- 注 14 (旧) 出エジプト記 24 章 9～14 節
- 注 15 モーセ五書(旧訳聖書の最初の五巻)の内の一つ。
- 注 16 (旧) 出エジプト記 3 章 5 節
- 注 17 (旧) 出エジプト記 3 章 5 節
- 注 18 (旧) 出エジプト記 32 章 4 節
- 注 19 (旧) 出エジプト記 32 章 19 節
- 注 20 (旧) 出エジプト記 32 章 27 節
- 注 21 (旧) 出エジプト記 32 章 20 節
- 注 22 (旧) 出エジプト記 17 章 6 節
- 注 23 (旧) 民数記 11 章 25 節
- 注 24 (旧) 民数記 11 章 4 節
- 注 25 (旧) 民数記 11 章 1～3 節

- 注 26 (旧) 出エジプト記 1 6 章 1 3～1 4 節
- 注 27 (旧) 民数記 9 章 1～5 節
- 注 28 (旧) 出エジプト記 4 0 章 1 7 節
- 注 29 欠落している前の部分で述べられていると思われる。
- 注 30 (旧) 民数記 1 0 章 1 2 節
- 注 31 (旧) 創世記 4 6 章 3 4 節、4 7 章 6 節
- 注 32 (旧) 出エジプト記 1 4 章 2 節
- 注 33 (旧) 出エジプト記 1 4 章 1 0 節
- 注 34 (旧) 出エジプト記 1 3 章 2 0 節
- 注 35 (旧) 出エジプト記 1 2 章 3 7 節
- 注 36 (旧) 出エジプト記 1 2 章 4 3 節
- 注 37 (旧) 創世記 4 6 章 2 9 節
- 注 38 (旧) 創世記 4 7 章 6 節
- 注 39 ラテン語とギリシャ語の混じった表現。正しくは、δένδρον ἀλήθειας
- 注 40 民数記 1 3 章 2 2 節にゾアルの名で出てくる。タニスはギリシャ語名。聖書はモーセがタニスで生まれたとははっきり書いていない。
- 注 41 Aelia Capitolina のこと。Aelia はエルサレムを再興したローマ皇帝 Aelius Hadrianus から。Capitolina はジュピターの神殿 Capitolium から。
- 注 42 (旧) 申命記 3 2 章 4 9～5 0 節
- 注 43 (旧) ヨシュア記 3～4 章
- 注 44 (旧) ヨシュア記 2 2 章 1 0～3 1 節
- 注 45 ローマの初代皇帝アウグストゥスの 2 番目の妻リビアに因んで、ヘロデ・アンティパスが付けた名で、(旧) ヨシュア記 1 3 章 2 7 節に出てくるベテハラムのこと。
- 注 46 (旧) 申命記 3 4 章 8 節 4 0 日間ではなく、3 0 日間とある。
- 注 47 (旧) 申命記 3 4 章 9 節
- 注 48 (旧) 申命記 3 1 章 2 4 節
- 注 49 (旧) 申命記 3 1 章 3 0 節～3 2 章 4 3 節
- 注 50 (旧) 申命記 3 3 章
- 注 51 (旧) 出エジプト記 1 7 章 6 節、民数記 2 0 章 8 節

- 注 52 (旧) 申命記 3 4 章 6 節
- 注 53 この部分矛盾がある。下記のように言い伝えではそうであるの意か。
- 注 54 ソドムの位置は不明。
- 注 55 ラテン語では Segor
- 注 56 (旧) 創世記 1 4 章 2 節、申命記 3 4 章 3 節
- 注 57 (旧) 創世記 1 9 章 2 6 節
- 注 58 (旧) 民数記 2 1 章 2 6 節、申命記 2 9 章 7 節
- 注 59 (旧) 民数記 2 1 章 3 3 節、申命記 3 章 1 0 節
- 注 60 ネボ山の南にあると思われる。
- 注 61 (旧) 民数記 2 3 章 1 4 節
- 注 62 ウヅのこと。場所は諸説がある。(旧) ヨブ記 1 章 1 節
- 注 63 (旧) 創世記 3 6 章 3 2 節
- 注 64 位置不明
- 注 65 (旧) 創世記 1 4 章 1 8 節
- 注 66 (旧) 創世記 1 4 章 1 7 ～ 1 8 節
- 注 67 (新) ヨハネ伝 3 章 2 3 節、アエノンの位置は不明。
- 注 68 κήπος τοῦ ἁγίου Ἰωάννου
- 注 69 (旧) 列王記上 1 7 章 1 節
- 注 70 (旧) 士師記 1 2 章 7 節
- 注 71 (旧) 列王記上 1 7 章 3 ～ 6 節
- 注 72 (旧) 創世記 1 5 章 1 8 節
- 注 73 (旧) 創世記 1 2 章 1 節、ただしここにはハランの名は出てこない。
- 注 74 (旧) 創世記 2 4 章 1 5 節
- 注 75 両端の日も数える。
- 注 76 (旧) 創世記 1 1 章 3 1 節
- 注 77 (旧) 創世記 2 4 章 2 2 ～ 2 3 節
- 注 78 (旧) 創世記 1 1 章 3 1 節
- 注 79 (旧) 創世記 2 4 章
- 注 80 (旧) 創世記 2 8 章
- 注 81 (旧) 創世記 2 9 章 9 ～ 1 0 節

- 注 82 (旧) 創世記 1 1 章 2 8 節
- 注 83 (旧) 創世記 2 9 章 1 0 節
- 注 84 (旧) 創世記 3 1 章 1 9 節
- 注 85 aputactitae, ギリシャ語の ἀποτακτίται から。俗人と修道者の中間的生活をしていた人々。
- 注 86 (新) コリント後書 1 2 章 3 節
- 注 87 λυκνικόν, λύκνος (明かり) から来ている。
- 注 88 (新) マタイ伝 2 1 章 9 節
- 注 89 ベタニアにある聖ラザロの復活を記念する教会。
- 注 90 幼児の奉献記念日 (新) ルカ伝 2 章 3 2 節
- 注 91 1 月 6 日
- 注 92 (新) ルカ伝 2 章 2 2 ～ 3 8 節
- 注 93 ここではミサのこと。
- 注 94 ἑορτή (祭) の複数形で ἑορταί であろう。
- 注 95 (新) ヨハネ伝 1 1 章 2 9 ～ 3 0 節
- 注 96 (新) ヨハネ伝 1 2 章 1 節
- 注 97 ギリシャ語 ἔλαιών (オリーブ園) から。
- 注 98 ギリシャ語の ἐν βομῶ (祭壇で) から来ているとも、あるいはセム系の bamah から来ているとも言われている。具体的には昇天教会のことである。
- 注 99 (新) マタイ伝 2 1 章 8 ～ 9 節
- 注 100 大体午後 7 時頃。
- 注 101 (新) マタイ伝 2 4 章 4 節
- 注 102 (新) マタイ伝 2 6 章 1 4 ～ 1 5 節
- 注 103 福音書にははっきりした記述はない。
- 注 104 (新) ルカ伝 2 2 章 4 1 節
- 注 105 (新) マルコ伝 1 4 章 3 8 節
- 注 106 (新) マタイ伝 2 7 章 2 節
- 注 107 大体午前 8 時頃。
- 注 108 (新) ヨハネ伝 1 9 章 3 0 節
- 注 109 (新) ヨハネ伝 1 9 章 3 8 ～ 4 2 節

注 110 (新) ヨハネ伝 20 章 19～25 節

注 111 (新) ヨハネ伝 20 章 26～29 節

注 112 過越祭から 50 日目に祝われるユダヤ人達の祭。五旬節。

注 113 (新) マタイ伝 28 章 1～10 節、マルコ伝 16 章 1～8 節、ルカ伝 24 章 1～12 節、ヨハネ伝 20 章 1～18 節

注 114 (新) 使徒言行録 2 章 1～12 節

注 115 この文と前の文との関係が混乱しており、明らかではない。

注 116 (新) マルコ伝 16 章 19 節、ルカ伝 24 章 50～53 節

注 117 (新) 使徒言行録 1 章 6～11 節

注 118 ローマ軍の駐屯地で市の立つ通りのことだが、ここではエルサレムを南北に走る大通り。

注 119 (旧) 歴代誌下 3 章 1 節、7 章 8 節





